

塔柳川

昭和四十二年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十八年四月二十五日印刷
昭和四十八年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五五二号



No. 552

柳縁親類同士

五月号

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 焼 餃子
又 焼 饅 売

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・な ン ば



TEL 641 0551 2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストア/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

国立 奥新和歌浦

・ 雑 賀 崎



国際観光旅館

う お また
魚 又 楼

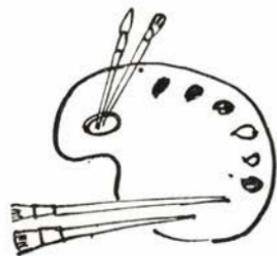
誇 風
る 光
海 岸 明
美 媚
を な

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

格下げの形で蔭居の老夫婦
坐りなおり半端なお世辞で派手に飲む

重症三年の病症から美事全快したT君へ三句

死線彷徨お浄土詣りは見合わせる
第二の人生という手土産で生き返えり
生き返ってお伽噺に似た暮らし



「ひとり」

ひとりでじっと考えると、自分のほんとの姿を見つめるとか、実は私にとって大変苦が手である。性格や育ちのせいもある。それに職業柄毎日百人近い応待の時間に追われて、一人落ちついた気分から逸脱しがち。こうした老人の悩みとも愚痴ともつかぬ日暮らしの折柄、宮城教授の「日本人とは何か」の中で、日本人の家屋構造が開放的で各部屋にカギをかけず、従って家族全体を一つの単位として行動し易い。コドモの過保護という問題は両親とコドモが密着した家屋の構造とも

結びついていいる」という意味の事を読んだ。思い当る事しきりである。しかし今更カギのかかった一室に籠ってばかりもならぬ。せめてあい間あい間に一瞬でも自分を求めてみる努力を怠らなかつたら、老人なりにその効果がある事に気付くであろう。絵筆に親しんだり、句作に専念したり、こうした時間に少しでも恵まれた私にとって、愚痴どころか、幸せ者だと感謝しなくては罰が当たるといふもの。

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

ブランコの揺れを残して始業ベル

吉岡 通児

川柳塔五月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

ひとり……………

中島生々庵……………(1)

八雲立つ出雲から……………

尼緑之助……………(2)

川柳初篇研究……………(百十八)

前田喜代人・故岡崎 重義・清川端 柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井 和雄 十府・岡田 甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……………(24)

傍島静馬……………(24)

ぼたんりょう乱……………

東野大八……………(22)

川柳塔(同人作品)……………

若本多久志選……………(4)

水煙抄……………

北川春巢選……………(30)

一分間の柳論……………

小砂白汀……………(58)
野村岬月……………(59)

秀句鑑賞……………(同人吟)

菊澤小松園……………(26)

……………(水煙抄)

橋高薫風……………(27)

事にふれて……………

麻生葭乃……………(25)

八雲立つ出雲から

尼 緑 之 助

日本古代歌謡、最初の一首、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治して後、新婚のやかた(妻こりの為)を須賀の里に定めた時、心をこめて詠ったと言われる。

やくもたつ 出雲八重垣 妻こみに

八重垣つくる その八重垣を

神話を丸呑みにするわけではないが、又、スサノオの実作かどうかは別として、二千年も昔の歌としては特選ものだ。

(註)須賀は出雲の国大東町、むらくも川柳会の木次町の隣接地

日本歌謡史の冒頭に掲げられたというところは、神話時代における出雲の国の位置を物語るように思われる。

出雲神話の中からカンタンに点描すると、先ず、国引きの章(国づくり)は、産業開拓に併行した出雲国統治完成の一篇である。

国ゆずりの章、目の上のこぶとなったこの国に対する高天原政権の機柔行為の一篇で、その最終舞台が稲佐の浜、現在出雲大社から一軒余り、日本海に面した海岸である。朝鮮

系だとか、南方系だとか定かではないが、文化産業の受け入れ口としての自然の港であったと思われる。

川柳中山道六十九次……(4)……………富士野鞍馬……(28)

麻生路郎選「童謡の森」……………福田丁路……………(44)

近詠……………諸家……………(25)

文学の……………高鷲亜鈍……………(29)

柳縁親類同士……………多久志・小松園・十郎・大輪・一三夫・庸佑……………(38)

新「猿蟹合戦」……………室山三柳……………(45)

五月節句……………香川酔々……………(46)

アメリカ便り……………藤村涼子……………(47)

無題……………関美子……………(53)

雅号ぶっちゃけばなし……………柳染鶴丸……………(54)

初歩教室……………恒松町紅……………(57)

大萬川柳「半日」……………本田恵二朗……………(50)

柳界展望……………川村好郎選……………(52)

本社四月句会……………(新之助)……………(55)

各地柳壇(佳句地10選)……………(庸佑)……………(56)

一路集「五月晴れ」……………岡崎祥月……………(58)

「記憶力」……………今西章雅選……………(48)

「米」……………原独仙選……………(49)

「客」……………中川晃男選……………(49)

編集後記……………(一三夫・葉子)……………(65)

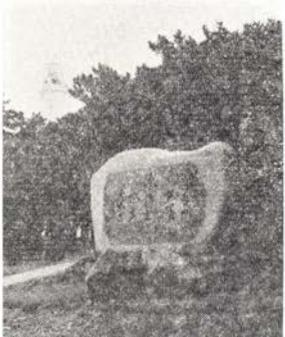
座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い (路郎)

私の句

スパルタで家出 放任でも家出

久家 代仕男



日御碕灯台をバックに句碑が美しいです。(板垣草丘)

高天原王朝に一応帰順したものの、遠隔地ではあり、安定した独立国として永続し、先覚者を神として群居、国内至るところに神社と神話を残す結果を生んでいる。神話に信憑性がない、と言えばそれまでだが、明治から徳川、戦国時代、更にその以前の歴史をたどり、追究すると神話につながる、架空な伝承とばかり言えない。ともかく、神武天皇から二千年以上、神代の姿と現在は当然変わって来ている。しかし、人間の生き方、考え方を一と皮むけば大きな本質的变化は少ないのではないかと思う。川柳、俳句が生れて三百年、明治は遠くなりけり、と言っても百年、初代川柳や芭蕉が各々けじめをつけてから、現代の句はどれだけ進化したか、前述の感懐、歴史の物差しを当ててみると、その進捗度は微細であることに気づき、又当然のようにも思える。現状打破、新を追うはよい(尊い)が、一挙に事は成らない。



若本多久志選

竹原市 森井菁居

紫煙ゆらゆらとジレンマだけつもの
生きてゐる限りの悪夢かも知れず
温室に咲いて試練を知らず散り
生かされて生きて果てない旅つづく
えにしほのぼのとベンチへ肩を寄せ
春を嗅ぎつけ馬鈴薯の芽がおどけ

神戸市 小浜牧人

読経するころを乱す銭の音
プライドが金のラベルを貼って来る
酒瓶の中に勇気が詰めてある
残り火の中で未練は未だ消えず
税務署を出ると俄かに腹が減り
揚っても揚っても雲雀に空がある

八尾市 香川酔々

稚魚すでに片鱗見せる朱い色
抵抗はよせと時間があざわらい
福耳で遠い雪崩れを聞く地蔵

卒業の眉根引締め門を出る
真実を求めて渡り鳥は立ち
切通し燕のために深く切り

出雲市 尼緑之助

テールは四人 左の手も使い
スコッチよペンの洩りへタイミング
春宵の悦 しみじみと贈り主

日御碕(二句)

海猫(うみねこ)の乱舞ねぐらに灯が点り
人間のエゴ海猫も住みにくし

倉敷市 本田恵二朗

万葉の佳人に会いそう古都の徑
鐘の音がそつともてくる古都の朝
雪国で拾った素朴があたたかい
老梅のあやうく咲いた一二輪
前向きで生きる男の大あぐら

大阪市 正本水客

渡岸寺十一面観音

雪落ちる音 観音堂の冷え白し
怒りの面 笑いの面 慈悲相あふれさせ

鳴戸岬界隈

なめし皮の手ざわりに似て潮流る
鳥一羽 瀬戸の流れを冬にして
水仙郷冬の斜面に陽がたまる

岡山県 浜田 久米雄

耳打ちの顔がほころぶ春の宵
なみなみと湯呑の酒がこぼれかけ
その中で四五人左派と見てとられ
不細工な顔が色気を匂わせる
年寄りの城尻込みをして護り

高槻市 若柳 潮花

米洗う水も彼岸の音がする
呼び出して蛇の目で送る南の灯
面影もかえらぬ女が夢に立ち
山いれた夫婦が霧へ消えてゆく
ひとさまの男へ夜の裾をひき

青森市 工藤 甲吉

恍惚の人も張り切るメーデー歌

出稼ぎの遺骨が下りる無人駅

「あゆみの箱」に美しい銭は鳴る

ホタル帰れドジョウ帰れとデスカバー

田を作るより詩を作る三代目

門真市 福島 鉄児

馬鹿になりなさいと理性が囁く
エリートに欠けるものあり人間味
好きな人探せと親もさじを投げ

嫁の荷が行く大安の街ラッシュ
お隣の不幸へテレビ消しておく

尼崎市 黒川 紫香

くっしやみをこらえそねた電話なり
見た顔と思もてるどうし振りかえり
恙がなく戻って茶漬の味がしみ
冬眠を起した蛙埋めてやり

三女嫁ぐ

三人目嫁がせプレハブ住いなり

大阪市 本多 柳志

恍惚の人とも見えず監査役
本心を聞くには窓が明るすぎ
草原に寝て人間の小さい智恵
防衛論のらりくらりと国平和
花を摘む児によこしまの慾はなし

大阪市 山川 阿茶

大宰府の梅は写真で花ばかり

ラッシュアワー三色スマイルよお早ようさん

人ごころ自分の物さし甘すぎる

スキンシップ湯浴の母親ほのぼのと

雑用にかまけ顔まで雑になり

倉敷市 水粉 千翁

靴を履く脱ぐ一日のドラマ書く

この自信掬うて朝の洗面器

乗り切って見せる流れを浮き沈み

霜を着た新芽に春のひとり言

大木になる芽のみどりすきとおり

松江市 中川晃男

湖の風 露地の奥から吹きぬける

春か コップ酒長閑にのどを越し

アマリリス そんな女に会った日も

振り上げたこぶし哀しい人生譜

倅せを受ける心がやせている

香川県 三井酔夢

受験期の運勢欄をみる愚か

子のために泣く涙だけためている

盲愛に溺れ失意の子をおもつ

つまずいて祈りを知ったありがたさ

恋さめて凡夫凡婦に日の長さ

島根県 堀江正朗

指先きに触れるものから春息吹く

嫁った娘の声がしそうな日暮れどき

食欲を廻りの音につり込まれ

ひと言を父親らしく聞いてみる

都合よい事だけ聞かも長寿法

和歌山市 垂井葵水

春灯に反抗 胸の数珠たぐる

啓執のひとつひとつに陽の恵み

乗りかえてのり換えて日々無欠勤

足なげて座す人形のパンタロン

潰瘍の胃を無視させに来る話

松原市 谷垣史好

採寸の手がアリケートなとこに触れ

二、三日寝こんで独身主義くずれ

自由業きょうも草競馬で出合い

あれ以来社長「赤旗」読み始め

春近くもみあげ少し短くし

藤井寺市 西いわを

感傷の潮じわじわ満ちて来る

生活の絆鎖に繋がれて

一茎の草が気品を整える

この道の裏知りすぎて踏み込めず

足音を盗み聞きした孕み猫

大阪市 天正千梢

土解をまわり人生だと微笑

課せられた迷い 影だけつかまえる

三食にふさわしい働きしかねてる

毒矢を感謝と緊張のよすがとし

心臓の刺如來が少し抜いてくれ

大阪市 宮尾あいき

わびしさがふつとよぎった老の坂

一人居の淋しさ亡夫に香をたく

夢で会う亡夫はあっちむいたまま
磨かねば金に見えなくなる指輪

清荒神参拜

袖たたみほろりこぼれた枯椿

大阪市 江城 修史

合鍵の温くさ理性をひきちぎる

燃え尽きてからも女はバラを抱き

決断を迫ればこびる瞳に出合い

暮し追う妻へせめても花を買う

残り火の消えなん果にある墓標

宇部市 平田 実男

親捨てた過去は言わない養老院

オール出席だけが取得の通知表

感情の鞭でも愛の鞭で逃げ

自己過信したのが崩れて行く早さ

気持より体が齡を意識させ

京都市 松川 杜的

鳴門岬

航跡を追えば霞の中なる煙島

水仙を程よく動かし海の風

フアインダー一杯水仙の香を貯めて

春が来る話か水仙と水仙の対話

カメラ撮りおと岬の老夫婦

大阪市 神谷 凡九郎

ゆきずりの会話へ胸をつきさされ

人間を考える神様でもないくせに
犠牲になるのが女の性なのか
弾むもの持って女の忠強い

喜怒哀楽メロディとなり日々暮れる

守口市 羽原 静歩

愛媛大学卒業四十年(三句)

幻の中にドームの見えかくれ

門衛のラッパせつなく春の宵

石槌の窓しらじらと明けて来る

御趣味はと聞けばお金を貯めること

学園の門をくぐってひとりぼち

西宮市 藤村 女

健忘症貸した小銭は覚えとり

天皇はなぜえらいのと孫が聞く

叱られている児も云分持って居り

振りむいた女心にある嫉妬

隠れんぼの鬼へ夕日の影長し

八尾市 飯田 悦郎

怪我をした指を四本が齒がゆがり

バラ咲かせ赤の恋しい齡になり

雨ごとに若葉がさわぐ春の詩

演技するためには馬鹿にならねば

ヤーローを風が運んで風が消す

鳥取県 鈴木 村諷子

たくらみのない牛の瞳の澄みきって

窓明けて鯉のおなかを抜けた風
老妻と夜のしじまをいとおしむ

ジュース飲んで雰囲気にとけんとす
バス賃をガチャリと情のかざもなく

島根県

小 砂 白 汀

身を曝け出して愚かな射手となる

悪人が押してもピンポンピンポンとベル

桃の花 春の裳裾の色なるか

展らかねばならぬ蕾にある焦り

病巣を扶ぐればきれいな血も流れ

大阪府

金 井 文 秋

医療費が只になるまで無事であれ

他人が付けたら案外安い自分の値

悟ってる顔で焦りを包みこみ

なぐさめる立場が逆になる失意

晩年を尾花の如く終りたし

大阪府

小 出 智 子

小春日の隣の電話鳴り続け

片目の達磨いつも心の隅に抱く

父老いて仏像のごと眠りおり

物干を一杯にして妻の春

語らえば人それぞれの苦を背負い

兵庫県

遠 山 可 住

創刊号みなはちされる夢を持ち

日溜りの春 初ものにして摘まれ

富士山の朝へ夜行の窓が起き
カチカチの浴衣でお湯へ導かれ
定年のない金婚へ揃う足

笠岡市

高 木 桃 里

べちゃんこに坐って仏間守る祖母

打てばびびく新入社員の間が活きて

痛ましい話を猫が膝で聞く

閉山の親子が還る過疎の村

紅裏に若さが残る 舞扇

大阪府

河 股 緑 水

二人で来た道二人で振り返る

税務署へ泣きたいような金を出し

連想を自由にさせているヌード

遠い道ぐんぐん駆けた日を思い

女ひとり心の隅に来てしやがみ

堺市

高 橋 千 万 子

じうたんのよごれへ春はもうそこに

マフラーを忘れそれから春になる

桃活けて老いの私もひなの夜

待つ人もなく白酒に女酔い

心はずむ訳を自分にそっとときき

島根県

大 森 孝 華

故里の土踏む足に意地がいる

枳然とせぬまま冬の影法師

向い風一歩さがった深呼吸

倅せは心のすみを詩に吐き
一押しを教えて帰る曲り角

大阪市 大坂形水

春の草踏みたくズックの靴を履き
デパートの鏡の中に老けた僕
振りきった拍子に宿の下駄切れる
これはこれは奥さんにスリッパ揃えられ
何をどう間違つての買ひ溜めか

大阪市 不二田 一三夫

神さまが作った涙だ流さんか
死んだ海の死亡診断書だれが書く
憎まれまいとする人間のあわれとも

寄席

南都雄二(四九)死去(昭・四八・三・一九)

これ「なんとという字」へ返事もうしない

「夫婦善哉」でも蝶々後家になり

岡山県 直原 七面山

曇り後雨ああ人生はままならず
聴診器がボインの豊かさにあわて
ソプラノとアルトで派手な痴話喧嘩
置き薬に頼つて過疎の村平和

宝塚市 傍島 静馬

末っ娘は遠くへ嫁らぬ腹づもり
性悪るの女とは見えぬ寺詣り
内心は世間がこわい黒眼鏡

水飲んで酔うのにスター苦心する

豊中市 戸田古方

それでいて鼻が一番気にかかり
バレてしまっているのにまだ言い直し
割切れぬままで油絵ほめておく
もう少し派手な緑がほしい部屋

高槻市 福田丁路

残雪の映える湯の里湯の煙
何神か知らねど杉のお注連縄
引退を惜しむ言葉に裏があり
何もかも相談に来る孫があり

下関市 石川 侃流洞

台風の目から覗いた青い空
節分から伸びる日足を梅競う
ひからびた喉へ甘露は水の味
停年からまだ人生の長い道

大阪市 西出 一栄

おない年皇后様はおすこやか
寝つかれず自問自答で東雲る
うす味が好みとなってきたも齢
墓参して心豊かな帰りみち

岡山県 大森 娛句楽

噴かしたり押ししたり故障車田舎道
改造へ鋸を削る図を拡げ
晩酌へ夕陽が沈む帰帆船

悪友は老いても女 酒のこと

竹原市 山内静水

スト最中発つには発った寿券

裏で見る踊り子の肌荒れていた

人様が羨やむ年金からの税

糸たれる子連れ夫婦や春の海

堺市 河内天笑

ヘヤーピンカーブで景色入れ替り

タオル一本こんなところにもスポンサー

新社屋みな借金という自信

妻と医者くんでお酒を減らされる

笠岡市 木山遠二

ライバルも居らず晩年静かなり

朝の風呂よろしニコニコ陽が覗き

留守のポストが回覧板を啜えてた

真直でもくねってもよし松が好き

松江市 岡崎祥月

列島改造政治不信の溝を掘る

風紋の個性カメラの持つ妙味

恋してる女心に地図を描く

胸張って一筋川柳作ること

倉敷市 臼井三林坊

電気鉋年期の腕がほっとかれ

政治屋に惜しい才能なりさがり

大阪で食えぬと知った島育ち

出戻りの意地が塗らせるアイシャドウ

島根県 藤井明朗

出勤の朝おびやかす救急車

世話になる事もあろう外孫へ気を使い

ひそと住むおんなの意地も衰えて

想い出をうち消すように春の雪

姫路市 梅谿庵 不醉

苦勞する 覚悟も出来て 愛しい

順序よく 並べて写真屋 ハイヨロシ

落丁へ 矢張り僕も 人間か

呼びすてに してよと彼女 ほれている

大阪市 福井野迷路

美女の胸診れば女形だ目をそらす

人生の土俵怒つた方が負け

文楽の人形泣かす三の糸

柳俳の二足のわらじ脚重し

倉吉市 奥谷弘朗

四歳の孫が遊びに来てくれる

そこらまで歩きたいよな服が出来

内職の肩を時々もんでやり

自己満足小さな穴を掘りつづけ

倉敷市 小幡里風

腹這いの前進男に意地があり

恍惚とイミテーションの艶に酔い

斬新な企劃へデカイ虹が立ち

勝つ自信過剰へみじめな風が抜け

倉敷市 小野 克 枝

真白く干して女は満ち足れり

苦勞したことは忘れて夫婦です

風船の自由舞うよりほかになし

地球儀を廻し子の夢はてしなく

広島市 山 田 季 賛

箒目をホームに通ず田舎駅

さつま路の味覚を賞めて旅だより

ローカル線ジーゼルカーがよく稼ぎ

金貯める思案を派手に立てて見る

富田林市 板 尾 岳 人

垂直に登る断崖へ風が揺れ

早春の山に小石が喋べり出す

嘘つかぬ山の魅力は妻に似て

笑わない山 雪どけの水落ちる

松江市 吉 岡 通 児

道一つつけるに賛成反対派

百葉の長の限界どのおあたり

それにしても間違い電話美声なり

その昔一揆をかけた地 トルコ建つ

大阪市 児 島 与 呂 志

末っ子の受験へ家中もめつづけ

おばはんがちょっぴりスマートらしく見え

飲み過ぎた言い訳だけで又どもり

電話から涙と一緒に訃報が来

出雲市 原 独 仙

麻雀を四者会談中という

ママさんが記事の受け売り夕餉の灯

ぼけた身へまだアルコールの刺激

おでんの灯職場の不満消しにゆき

大阪市 有 信 新 之 助

売れだして今夜も定期の要らぬ肌

雨の日の草書の筆が疲れがち

吾れもやはり人並みか五十腰

税金が決まればともあれ春がくる

岸和田市 福 浦 勝 晴

出前持ち五重の塔のように積み

税金を納めに行って待たされる

菜の花に戯れてゆくチンドン屋

二ん月の風がきびしい物価高

美弥市 安 平 次 弘 道

結果より過程善意は認められ

遵法で汽車が遅れる法治国

馬鹿でないから馬鹿の役がこなせ

花は正直温室にだまされる

守口市 村 田 瓢 太

結ばせてやりたいドラマまだつづき

わがころもかくあれかしと鏡拭く

パパ・ママより爺ちゃん好きの孫もおり

逆もまた真なり 勞苦もまた樂し

大阪市 河井 庸 佑

參觀日もう来てくれる母がない

なるようにしかならないと悟り切り

左遷までされて上司をうらんでず

子の為に振ったむちとは受け取らず

倉敷市 野 田 素身郎

飲める人には飲んでもらった一周忌

ちよっぴり似た過去があり好きな歌

この人もぼつぼつ多忙を理由にし

反対した例外規定に救われる

米子市 林 瑞 枝

痛む腰揉んでまだ秘すボウリング

腹ふくる事あり貝の殻を閉じ

敬遠をされる母情を押え兼ね

孫かえし鏡台へ女としてのパフ

神戸市 仲 どんたく

漫画読む長髪赤軍のにおい無し

摺り減った頃僕の靴 僕のもの

ぼつつりとヤングの中で一人飲み

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏おどり食い

大阪市 中 川 滋 雀

面舵一ぱいそしりを浴びて日本丸

なに思たかぼつくりさんに願もかけ

不幸にも第一印象良すぎてた

欲呆けて打てばピリオドさえにじみ

奈良市 宮 口 笛 生

地球儀の隅で日本赤く燃え

鉄道学園生活

小春日の睡魔にこらえ抜く授業

老眼をかけて黒板ノートする

のみ込みも早く忘れるのも早し

姫路市 大 江 秋 月

炊事中電話は少し待たされる

着物きることも知らない娘の育ち

無人化の駅も桜は春仕度

事故現場誰が手向ける四季の花

泉大津市 村 上 春 巳

信号の向うもいらいらしてららし

新入社大人の話ちとわかり

カラカラとGパンで行く娘よく笑い

あこがれの都に未練断つ夜汽車

平田市 久 家 代 仕 男

冬木立落葉の中のこもり堂

ライバルの言葉いいなと聞き惚れる

ぼつくりと死んで何かを言い足りず

追憶の目に悲しみの風が去る

今治市 越 智 一 水

枯れていてざくろのトゲはつきささり

後姿から友情を受けとめる

雪の夜に酒でくずれる恋があり
四十二の僕も小百合が好きだった

東大阪市 宮西 弥生

しのび逢うときの仮面別にもち
女百態春だから春だから
邪魔になる母の躰を聞く安堵

派手好きの地味が気になる日の失意

松江市 小林 孤呂二

盃の底に今日のよろこびがある

春の芽は貧富へ差などなく伸ばし
働ける裸のすみずみまで眺め
保育所のピアノも春を弾いている

松江市 柳 楽 鶴 丸

混浴で聞く都々逸にある色気

短冊にすりきれた筆が生きている
大胆な話二人だけの夜

富田林市 岩 田 美 代

迫るものない安らぎがふとわびし
好きな彩着て空間埋めてみる

バラのトゲ指に埋めて逢いに来る
土建屋を継がす長男やさしすぎ

富田林市 木 村 弥 栄 子

能弁にその沈黙が語ってる
其の傷が癒着したまま日を越し

思い切り踊り狂って落ちた灰汁
惑う歳新たな自己を掘り起す

大阪市 川 口 弘 生

妻と子を捨てさせ女真いでる
税務署を出て三月の陽が温い

合格に三月の街 彩を増し
寝ころべば若き夢湧く草いきれ

兵庫県 河 原 みのる

たかが人生その一生がむつかしい
墓だけは残しといてやゴルフ場

ヒヨドリも赤実の雨天先きに喰べ
何かしら領き合うて蟻別かれ

倉敷市 藤 井 春 日

腹の子が動いて不倫責めたてる

真実は噂の裏で呼吸する
一生を託す夫に瞳のかげり

貧しくも心豊かに道を行く
広島県 高 橋 鬼 焼

酒の味ちびちびかんで一人旅
春の庭遊びつかれた玩具箱

子の知恵の一つ一つに夢があり
逆転のない人生の鍬を振る

大阪市 今 西 章 雅

残酷焼き真赤に串の海老いかる
地価不動砂丘の砂を掌にすくう

保護色がないので掛けた色眼鏡
成人式ざわざわ祝辞聞き流し

尾崎市

高津徹也

黒雲の襲いかかって冬乱る

一帯に連なる冬や地平線

夕日もだまりこんでそっと夕風ぐ

小さく高き少女の胸を春の風

富田林市

浅川八郎

寝たきりも旅はしてます夢の中

夢の中思わぬとこで胡座かく

世に人に甘えに甘えこの余命

寂しおす気休めばかり聞かされて

岡山県

出原敬一

賢妻と愚妻話がかみ合わず

自信過剰ころんだ試歩ののが笑い

母の亡い夕膳へ姉花をそえ

校庭の草花にも別れ告げる歌

倉敷市

谷井扇水

ワンマンの知恵を預る秘書のメモ

同席と云う光栄の隅に居る

柏汁で酔う細腕に頼り切る

人間の弱味は惚れてから判り

呉市

植田英詩

大吉のみくじ案外冷淡だ

ひとり来た屋台孤独な俺であり

アンマ機のリズムに納得しない肩
小さな手ママへねだっている抱っこ

大阪市

室谷徹舟

意地を持つああ職人の自尊心

定年へ我足跡のちやちなこと

お布団を上げるも掛声かける妻

盲腸の傷跡動くストリップ

西宮市

島居百酒

二枚切手禄な便りでないと知る

せめてもの慰め空想逞ましく

円切りで株の底値が来たにせよ

辛抱が足りぬと他人だから云え

生駒市

草深醉升

奈良霊山寺にて

御利益がまだまだ欲しい掌を合わせ

御祈禱の読経に邪心つき纏い

お水取り雪もお義理の薄化粧

頷いて聴いて貰っただけのこと

竹原市

時広一路

嘘嘘嘘 信じられない から涙

男ですレールの上が味気ない

スクラップ忘れた過去へ錆びたまま

裏知らぬ倅せそっとして欲しい

和歌山市

野村太茂津

指導者を自認静かな怒り肩

とび出して棹の外から見よ波紋
鏡にも合わせ鏡という悟り
いつまでも待とうなどとは思つてず

新宮市 大矢十郎

角のない娘とは思えど角隠し
土地売った噂呉服屋出入りする
ポウリング投げて家計を振り返り
学童の弔辞涙の枯れた頃

笠岡市 松本忠三

玉の汗流がし力士のインタビュ
大舩かいて宿直異状なし
感冒ひきで休む電話へ咳も入れ
近頃はめっきりという父の愚痴

枚方市 宮川珠笑

伸びきったつくしが思うここも過疎
悄然と焼かれた畔に立つつくし
月おぼろ一文なしで酔うベンチ
がまんもうピークを越した腕カパー

大阪市 西川誓二

枯葉焼く煙の中に春の詩
不覚にも先き走りしてお節介
嘘嘘嘘騙された女鍬着る
初孫に祖父と呼ばれる夢育つ

倉敷市 松下梁水

また転ぶ起きる一歩ずつの価値

子を論す父も裸になってやり
磐石の決意を秘めている微笑

長男私立中入試

祈るほかなし浅学の父として

東大阪市 竹中綾女

奥琵琶湖方面

バスガイド帰路は無口になって坐す
比良比叡残雪抱いてそびえ立ち

水鳥の群に入り度や琵琶湖畔

地の底へ押し込めよう雪に雪はげし

大阪市 河野君子

沈丁花闇の深さに思慕の情

汚水の泡さえ一瞬の美を作る

心写す針目に素直な指でなし

整頓されすぎて安らぐ場所がない

大阪市 飛田好一

花便り春闘便り春さむし

たくましい草の生命に教えられ

席一つ譲る勇氣を出しおしめ

三重県 川上大輪

二人三脚妻の歩巾に合わない日

いい齡をしていい齡に気が付かず

うたた寝の母へ嬉しく氣を使い

おむつ干す空へせめても欲しい青

東京都 増田次章

群衆の流れにまかせている安堵
人事異動また歩き出す曲り角
順調なある日よそよそしい周囲
小心翼翼 ささいなことが夢に出る

樺原市 岩井本蔭樺

ヒーローは俺に一瞥くれただけ
鍵束の重み黒字が続いてる
決断を迫る瞳が動かない
まじないのつもり消火器一つ置く

鳥取県 谷無閑

冷えた仲女の方が取り乱し
さり気ない瞳は窓の外にあり
冷静にかえりて嫉妬をフト恥じる
錦絵のような女でどこか抜け

松原市 玉置重人

うち明けた胸筧竹に乗せられる
大阪に籍あり虹の街でどこ
自制するその益のほろ苦さ
入試パスネの細さが気にかかり

島根県 中島英子

歳時記にさからう菊が春に咲き
補聴器を忘れた耳が困る旅
国訛り添えた諸説を聞く総理
冬眠の蛙をおこす春の風

島根県 景山綾美

その続きちよつと待たせてコマージュル
おせっかいそれから先は古傷だ
結局は時間が風化させた愛
SLと書く手 機関車磨いた手

倉敷市 能登原白水

一時を子等の話題に同化する
レントゲン何もなかった茶がうまい
北風を亡父の鞭として温い
公害を知らず梅林が媚びてくる

八尾市 大路美幸

山頭火を読んで
木質宿汗の匂いが酒へ融け
鉄鉢へどぶろくならぬ米の音
愚に生き愚に徹した酒の味
酔うたままあの山越えて旅立ちぬ

鳥取市 河村日満

夫婦もう長生きという慾もなく
儂がさきわたしが先きと死ぬはなし
雨もなく近年雪もなく候

岡山県 岡村久志良

ノン・フィクションのそのお惚気が通らない
年かいな 又若い頃若い頃
電気毛布のスイッチ入れる照れかくし

大阪市 吉田圭井堂

オーバーも左り前だが男らし
おいこらと云うてた頃が友だった
子供だけ入れに走った社会鍋

大阪市 木村 水洞

法に順ずればノロノロになる列車
スポンサーに気兼ねしている政治力
浪人になってよかった朝寝坊

愛媛県 渡 辺 眺 童

東京行

色あせた皇居の松に見る日本
鳩のとぶ高さに大村益次郎
ニュースだけ見てねる父を不思議がり

伊丹市 小 川 静観堂

老残の肌を合わせる夢もなし
うりずんの詩のおもいでがそのままに
晩の一合老いらくの生甲斐か

桜井市 岩 本 雀踊子

一日の命はがして行く暦
うら若き妻あり朝の髭を剃る
武装する女に生きる道がある

鳥取県 清 水 一 保

残雪を憐れむ如し春陽さし
躍動の息吹き朝霜ついて伸び
今日の日が始まる朝の台所

小松市 馬 場 魚 山

泉水の石 素人でない配置
二次会の乱れを悔む事務机
虫眼鏡合格発表たしかめる

愛媛県 村 上 旭 童

三月の風がさそった菘坊主
春雨の中で釣れない鮎を待ち
鶏もようしめん男に見捨てられ

京都市 都 倉 求 芽

カラカラと素足の下駄が春を知り
払い落したのが幸運の矢だったとは
倅せでない灯も夜景の美に混り

岡山県 横 山 一 声

お早ようへゆうべの酒がまだにおい
デイトも予約順と云う娘
初孫の名を考える辞書を借り

東大阪市 竹 中 肖 二

歴史家のメスは神話を切り刻み
退屈を搞う歯科の週刊誌
週刊誌佳境に入って名を呼ばれ

松江市 恒 松 町 紅

あこがれていた故郷も排気ガス
はつきりといえる役職者で好かれ
別居して尋ねる孫の人見知り

鳥取県 青 木 遊 星

共有の太陽家へはあたららない

ホステスの収入世の中狂ってる
だぶついたドルが暮しをしめつける

岡山県 池田古心

口割れば虚言とならん日の黙秘

俺の山だったへ別荘建ち並び

パン牛乳瓶捕らない猫となり

鳥取県 森田布堂

たかぶりにて無言で吸わず花の蜜

まぼろしに耐えつつ墓の石を撫で

大学を出たが方向定まらず

倉敷市 竹内翁童

倅せを追いかけ職の落ちつかず

ブルーチップのほしい妻のむだ使い

良心にふたをしました出来心

岸和田市 葛城伊三郎

見くびられた客は隣でたんと買い

一切は空と知りつつ老の欲

自己評価する程出来た人でなし

東大阪市 斉藤三十四

冬山の白さの奥にひそむ牙

一円よ誰も捨ててくれんのか

国道の雀自動車恐がらず

大田市 藤田軒太楼

あきらめの暮しに慣れて妻も老い
持ちつけぬものを持つから身に余り
春風駘蕩池の鯉まではねてみせ

諫早市 原田明春

追跡を悲鳴にも似たパトカー

ガレージへ一夜を借りた倦怠期

入学式あなたがお母さんですかとは

大阪市 黒田真砂

心の扉軋みて愛が崩れ行く

流された彼岸にあった今日の倅

子を持ってぬ母あり捨てる母もあり

羽曳野市 大峠可動

冬はたしかに木枯らしの笛が鳴る

宿命の風に押されてひた走る

真実を拾い合つて夫婦という楽譜

富田林市 和田維久子

風雪に堪えた老母の芯強し

つれづれに出かけたくなる優待券

眺えたように二人目男なり

岸和田市 林裕子

野良婦えり野菊ゆれてるかごの中

漁師の目鱗で光る群れをおい

行商の女野道の霧に消え

自分の間が長い戸が閉り
たまにはじつとして経読まん

名古屋市 吉田水車
加賀市 細呂木魯木

勤めぶり玉虫色で榮転し
解決に達し政治は入院中

倉吉市 渡辺菩句

スナックに惚れ葉売っている商法
湯の町に灯が入りおとこおんなの眼

大阪市 神田秀峰

物価高へそくり出来ぬ給料日
下積みの恋は出世に捨て去られ

氷見市 関美子

ドラムソロ祖母観念の目をつぶり
母として妻として己の不確かさ

西尾 栞

雑草の踏まれる位置で花が咲き
吃水のスリルを砂利舟がゆく

座禪くんでて手形目に浮かび
男の指輪その人格を疑えり

内幕を知ったときから寄りつかず

前号訂正―読者欄ここからは活字小さくなり

菊 沢 小松園

寒に咲くさくらと見えて友もなし
声出してしまった夜半の軽はずみ
毗を決す鉢巻しめなおし

邪魔な石飛び越え春を知る新芽
釘一本打つのに家主へ走り

若本 多久志

(熊野路吟行)

熊野路に潮騒を聞く旅楽し
澗八丁千古の謎を秘め沈む

文覚の名も懐かしき那智の滝
二の丸の宿辺はるけき潮けむり
古代史の謎解きかねて除福の碑

北川 春巢

特価品でかいペーパーバッグくれ
片肺を頭の上で埋め合わせ

バラ色にものみな見えて学卒える
年だろか卒業式へ涙ぐみ

叩けよさらば開かれん叩ききり

(祝聖書学院入学)

川村 好郎

窮すれば通ず通じてからわかり
口で云うほど老人に成り切れず

春の雨ひとり居たく居たくなく
完備した老人ホーム見とくだけ

恍惚の流れに浮くかもの忘れ

川俣柳 初篇研究

(百十八)

前田喜代人 川端柳風
 故
 岡崎重義 高須啞三味
 清博美丸 十府
 藤井和雄 岡田 甫

694 たつ波の中へ豆腐をもって出し

五 扇

藤井 11 たつ波は端午の節句にたてる幟の一種。その上部には紋章を下部には立浪の模様を染めてある。「もって出し」は、岩波文庫「初代川柳選句集」(下)の索引によると「持って出し」でなく「盛って出し」とある。五月の節句に男の子がママに育つようにと、豆腐を一杯盛って出すのである。五月節句と豆腐の関係は、しらべてもわからなかった。「立浪をい潮時に産み落し」は男の子出産を祝った立浪の句。高須 11 どうもはっきり判からぬ。「たつ波」になにかほかの解がないかと、いろいろ調べてみたが、今のところ見つからぬ、が、礎解も落ちつかぬ。再考を要す。

丸 11 解せず。

打出のころ泡雪は葛をねり

二 31

の壺屋の泡雪豆腐にでも関係があるか調査中。

岡田 11 「立浪」は当時流行の模様でした。浴衣類などはもちろん井や皿までも、これがはやった。日本名著全集にも入っている洒落本「田舎芝居」(天明七)の冒頭にも「立浪に水車を染め出したる手織木綿の単衣物(ひとえもの)」とあるし

四月の紺屋立浪にあく

武 1 3

という句もある。「武玉川」の句はもちろん今なら五月で、染物屋は浴衣を染めるのに最も忙しい時期です。皿や井などの器物にまで流行したのを立証するいい文献を江戸随筆で見つけてあるので、残念ながらいま病臥中で引っぱり出せません。とにかく「立浪の中へ豆腐を盛って出し」のこの句は、立浪模様の浴衣を着た人の中へ……とも解されぬことはないが、やはり藍色で立浪模様を描いた皿か井に冷奴を盛って客に出した。それがいかにも涼しげに見える……という、夕方あたりの情景と小生は解します。

藤井 11 立浪模様↓皿・鉢となると、なるほどこの句はすっきりする。
 丸 11 立浪御説明を得てはすっきりしました。多謝。

695 三年が間有髪の尼になり

一 甫

藤井 11 御存知松ヶ岡の句。尼は尼でも駆け込んだ有髪の尼は三年たてば縁が切れて、好きな男と世帯がもてる方便な尼だとの意が含まれている。

高須 11 「好きな男と世帯を持つ」は後のこと。とにかく足かけ三年「有髪の尼」で我慢すれば、現在の亭主とは縁が切れるのが東慶寺の特点。

前田 11 賛。ただしこの句のうらには間夫がある。

丸 11 岡田 11 賛。

696 捨葉一ツぶく置て耆婆帰り

一 甫

藤井 11 耆婆は印度の名医。釈迦に婦依し、

中国の扁鵲と並称された大医である。医は「威なり」とも「意なり」とも、また「衣なり」とも云われるが、この場合は「医は慰なり」で、助からぬ患者に対して捨棄一服も、名医なるが故に一そう尊い。医学が科学として進歩した今日、耆婆一服の捨棄ほどに現在の医師が感謝と信頼をうけているだろうか。信頼こそ医師と患者の間のすべてである。これがなくては両者ともに、これにまさる不幸はあるまい。医師会と保健団体とが仇敵のように、いがみあつて今日、この感が一そう深い。

高須「キバ」はピンバシヤラ王の子で、アジャセ王の庶兄、名医として有名である。柳雨翁は「釈迦の臨終」と解しているが、礎解は医者としての意見で、一応首肯できる。

丸「贊。耆婆を名医——富裕な町家に呼ばれた法眼などを見るも礎稿もなりたつ。耆婆その人と見れば柳雨説も可。句面からはいずれとも断定し得ない。

岡田「やはり釈迦の臨終でしょう。しかも極楽浄土にゆくと言まわっているのですからもしかすると医者としても、釈迦入滅は必ずのとともなれば、そうジタバタしなかつたかも知れぬ。とにかくムダと知りながら薬だけは置いて行つたらう……との句。

697 手を出して足をいたゝく八豆腐屋

八中

藤井「例により高尾事件の伊達候の豆腐屋の一件。高尾のごとで暴漢の襲撃を逃れ、京橋の豆腐屋で水を乞うて、その礼に伽羅のつまを足として、手と足をからめただけのつまめ句。

過分といふ礼豆腐屋はつにうけ金のわらじで尋ねてもない御下駄

川端「贊。足にはくべきものを、平伏して頭にいただいた。

高須「全くつまめ洒落句だが、狂句にならなかつたのがせめてもの救い。

丸「贊。岡田「贊。但し「手を出して足を頂く」という俚諺を採用した句作であることを一言する必要あり。

698 きれでした文を宿下りくれる也

水砥

川端「きれでした文」は押絵を洒落れたものであろう。押絵または貼絵ともいい、既出。大奥の女中の間に流行した役者絵の押絵を宿下りの娘がくれたのであろう。

高須「そうであらうか」「きれでした文」が、押絵・貼絵なら「文」が疑問。もし「フミ」なら、何かに伝えるものでなくてはならぬ。だが、役者絵なら何を伝えるのか？

岡崎「きれでした文」は何かの比喩だろう。その何かがわからないのでお手上げ。前田「きれでした」は「きれでしたた

ぼ」（船比丘尼）の用例があり、當時の流行語のひとつであらうか。単に「ふみ」の形容に用いたもので、あえていえば「きれふみ」それも流儀の通知書で、何もみやげとでない宿さがりがくれたのが、この文であつたことをよんだ句ではあるまいか。自信はない。

清「きれでした文」の「文」の字を「ふみ」と読むか「ぶん」あるいは「あや」と読むかによつて、意見が交錯してくるものと思う。小生は「ぶん」と読んで礎稿に賛成しておく。お屋敷に奉公する女の宿下りであるため、わざと押絵といわず「ぶん」をむずかしく表現したのかも知れない。

藤井「きれでした」がわからない。「縁の切れ文」と解してみたが……。

丸「きれでした文」全く見当がつかない。叩頭。

岡田「きれでした文」は「布で作つた文」の意味。礎稿でも述べているように、御殿づとめ（武家屋敷づとめも含む）の女中はつれづれに当時流行の押絵をたしなんだ。その手芸品はいろいろだが、簪入れや楊枝入れなどに及んでいる。楊枝入れの形は特に結び文がしゃれていて流行。それを宿下りのときもらつた……といふのである。もちろん男であろう。字を書いている恋文をもらつたのなら嬉しいが、封じ文でも、布製の楊枝入れでは……の意が暗にふくまれている。

ぼたんりょう乱

東野大八

る。

余生など牡丹は知らぬいさぎよき

—男には見せまじ牡丹散るさまは

—愛欲の行く末見たり緋のぼたん

三井醉夢さんの、最近著しい進境りの作品の一つである。大胆率直なこの女流柳人の秀作を前に、うちの牡丹もいまや開花寸前である。二もとの枯木の切葉のみずみずしさの間には、新しい毛筆用の筆先を並べたような芍薬の芽が、一むらの円陣をつくって青空を刺している。この駄稿が活字になるころ、この牡丹、芍薬たちは見るも無惨な老醜をさらけ出し、すでに跡形もないだろう。一年のうちの長い時間の中を、つかの間の矯慢の奢りをみせて消滅していくこの花こそ、花の生命の短かくての詠嘆を惜しみなく示すものだろう。

私はこの花王の一瞬の生命にふれるたびに、平安朝の世の宮廷ムードを想い起してならぬのである。カラフルな十二単衣のけんらんたるもすそのひろがり、しかし、無惨やそれは忽ちのうちに散華瞭乱してしまうのであ

牛車に打ち連れだつて乗り合わせた殿上の若者たちが、鬼気迫るばかりの懐しい癡屋を見返りながら

「清少納言もひどいことになったなあ」

一人がそう傍らに声をかけた瞬間ニユウと

鬼婆さながらの貌が破れすだれの間から出て

「駿馬の骨を購われずや」

と不気味なしわがれ声もむきつけに言う。

かつて宮廷をうならせた才色兼備の清少納言の成れの果こそこの鬼婆だったのである。

「駿馬の骨」とはそもそも何か、かつての日のその才気をか、それとも緋牡丹のごときあの肉体をか。(清少納言零落秀句集)

このデンで現れ出でたるは紫式部—彼女もすでに安達ヶ原の鬼婆だ。

「そこなお若い衆、よくききやあ。恋歌の

いま一押し口説のコツは、いとなまぐさき

循環論じゃあ、心得なされ—そなたが好き

好きなのじゃそなたが。大和たおやめはこの

繰り言によわい。直観と感情のそのあやどりこそが、うたのころの常の一つじゃ—

まるで川柳詩の作句のコツみたい、乱抗

齒も汚らしく、いとむきつけく言う。この貌

がかつての日の紫の前とは誰が思いうかべようぞ。ああ空即是色—

まだいたね。才女の嬌色小野の小町。

—岩の上に旅寝をすればいと寒し

苔(こけ)の衣をわれは はかなむ

若い遍照上人をそういつてからかったハイ

ティーンこのころの花もあざむく美少女が、や

がてその晩年は奥州にさまよつて老乞食とな

つて窮死していく。ああ、色即是空。

在原の業平は、小町と好カッブルの美男子

だが、彼はそれ故に十二単衣の中の女体に、

二十歳半ばではや虚無を感じた。それ故に

か、九十を過ぎた老女の懸想にこたえて、そ

の想いを行為でかなえてやった。今は今もう

……と心おきなく愉快した老女のその明る

い顔こそ、当世福祉国家の理想の姿ではアル

マイカ。

男前の点ではいささか業平どのに劣ること

万々の私だが、その業平がどことこのう好きな

のである。ある夜、酒酌み交した話の座で、

彼は五十面のエビスさん型のふくよかなその

頬をふくらませてこう語つたことである。

「清少納言、紫式部、小野の小町など僕に

いわせれば理に敏きは色を消すで、さしたる

味合いもごんせなんだ。元来が彼女らは宮

廷の女事務官で、教養担当の記録ライターと

いっていいでしょう。地位も財産もない宮

廷の傍観者であった彼女は、随分とセック
ス面では不如意を感じていたでしょうなあ。
そのことで体験より空想が上回る破目とな
り、他人の情事をわが脳中で倍増させて喜ぶ
傾向が強い。そのためプラトニックな詩的要
素が優先する。かくて典雅高尚な半透明のベ
ールで愛欲は押し包まれていく。僕のよう
な斯道のハンターの実践主義者からすると食
い足りないことおびたしい。ところが、五
十の坂にかかった今は、それがまたこよなき
ものと知った。いまさかんなボルノ解放論な
んで一休何を求めてそうした世迷い言をい
うのかわかりませんでしう」
うれしくなったね、こちとらは。そこで私
はのんべの悪いこれが癖でしてついねエ。
「映画監督で有名な溝口健二は、王朝もの
の作品を作るときには、女優たちに十二単衣
を着用するものは、ノーズロースで出演すべ
しと厳命した。おかげでその映画はいうにい
えないいろいろが出たそうですよ」
といえは業平氏、グイとサントリー60をあふ

生駒だより

麻生 葭乃

一不二田一三夫妻一

(A)
としをとっても寒さ知らずであった私もち
のごろは真綿を着物下へ重ねるようになりま
した。

って、索然とこうとり結んだ。

「十二単衣は生ウニだな。黒いイガイガだ
らけの底に、肉色も生臭い秘処がある。落ち
目の宮廷野郎たちはそれに狂奔した。くすん
で一期よ、ただ狂えーと漁色の哀歎なんて、
しよせん、虚しいもんです」

牡丹は花王というのはウソである。

中国では牡丹は唐以前には鑑賞されること
はなかった。わずかに謝靈運(陶渊明と併称
される詩人)が「竹簡水際 牡丹多知」とい
ったことがある。これが花王第一の知己とな
った。五雜組で謝靈運はいわく、

「世間で牡丹はホメずきのきらいがある。
牡丹は豊艶にして余りあるものがあるけれど
も、風韻に乏しく「幽」においては蘭に及ば
ず、「骨」では梅におよばず、「清」では海
棠に及ばず、「媚」ではとびに及ばない。し
かるに世間では花の王としてゐるのは富貴の
気品が人を動かしやすいためである」
またこの先生重ねていわく。

何をしてもスピードののろさ、われながら
齒痒いことです。如何に自然の現象とは申し
ながら、そらきこえませぬおてんとう様と、
ちよっぴり愚痴りたい気にもなります。近鉄
沿線の板はまだ蕾も持ってません。彼岸すぎ
までは番狂わせな寒さがやって来る生駒でござ
います。二月堂のお水取りも寒さにおびえ
て見に行きませんでした。千支が蛇ですから
まだまだ冬ごもりが続きます。

「牡丹は白が多い。紫色これに次ぎ、真紅
のものはまた得がたい。牡丹に黒色があり、
見る人を愕かせたが、これは墨汁を根にそそ
いだからである。緋牡丹とて根に紅がらをそ
そげばそれで足る。牡丹はなべて白である。
ある人、眼にも鮮やかな黄牡丹をみて立所に
魅了され、千金をもってその一株を得たが、
来る春に咲くをみれば、それは白花弁の花に
まされもなかった」

千紫万紅のぼたんの色どりは。なべて土壤
一つの化粧と知れば、どこかその生理は女性
に似ていて、そのさがど人生に通じていく。
つかの間のけんらんさであるからこそ、幸せ
なのかもしれないし、尊いのかもしれない。
ここまで書いたら、ひょいと播州の俳人瓢
水の句が頭の中からとび出した。

一葦売って日当りのよき牡丹哉

千石船五艘まで持った男の落魄の諦観の句
だ。ここまでくればこの花そのものも人生の
シンボルかもしれない。

(B)

薫風さんがお母さんと四十八カ所の巡礼を
半分すまされたそうで、全部徒歩だときさま
しました。私は二日間写真の整理をしただけで筋
肉が痛み疲れて寝たたり起きたりです。

丁路さんは本を探がすのがお上手ですね。

(「童謡の森」P44のこと)

一恍惚の人に「なりそな忘れず生く

一エネルギーが何のたしにもならず生く

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 24 —

今ならば死なずにすんだ子規ならん

註・黙禪氏はホトトギス派の俳人。狸通氏は狸つうの人、趣味の店「狸のれん」を経営。

南海電鉄川柳会「株」

未亡人端株の処置を頼みに来

三十六年九月号

不朽洞句帖

夾竹桃むかしながらに暑いこと
七月の裸うれいもののうち

道後温泉にて

坊っちゃんと一脈通じる湯にひたり
道後の湯黙禪さんへ会釈する

狸のれんへ腰を下ろしたへそ曲がり

妻君にまかし狸通は今日も留守

お土産も坊っちゃん列車竹細工

土産物も子規漱石じゃ儲からず

土ひねりに砥部へ

ここからが砥部か重信川渡る

松山市の子規堂にて

子規の部屋ランプも置いて芝居めき

今ならば死なずにすんだ子規ならん

註・黙禪氏はホトトギス派の俳人。狸通氏は狸つうの人、趣味の店「狸のれん」を経営。

南海電鉄川柳会「株」

未亡人端株の処置を頼みに来

三十六年九月号

不朽洞句帖

野球放送のスイッチを切った涼しさ
彼も死んだらし残暑見舞戻る

ビールですかお酒ですかと老らくの

外国が近くなつた行かずともよし

赤になつたよと親父をおどろかせ

ニッポンの隅で生きてる生きている

昔とは父母のいませし頃を云い

忘れるものの一つに貯金帳がある

ほつといてくれと釜ヶ崎に生き

にしなり支部句会「迷い」

迷い続けて八卦もムダにする

南海電鉄川柳会「見送り」

見送りでおっちょこちよいがシャッターきり

(傍島静馬)

事にふれて

麻 生 菫 乃

ひとり子のわが身勝手なユートピア
わきみちへそれる賽ころだったのだ
スタートの一頁からぐれていた

屑籠の底から何を探す気か

ベヂタリアンになれと病床からたより

多角形趣味の青年火の粉撒きちらす

男波女波浜にしたしむ日が続く

産業スパイと云えど此世に生きる道

偶然の出来事人の生き死にも

ピラミッドも姿消す日のありはあり

ベテランはきれいな嘘がさつと出る

岐阜市 市川 鱗 魚

山すでに呼吸二月の陽が届き

叱る顔整え叱るママポリス

さくら満開少し飲めたらなと思ひ

東京都 池口 呑 歩

花咲かばあー味噌も醤油もまた上がり

花咲かばあー塀の向うはドル・シヨック

花咲かばあーその酒にさえ防腐剤

今治市 長野 文 庫

ベレー帽かむっても目に油断なし

評価して心さみしいプレゼント

言い返えず言葉考えながら行く

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

貧乏の底で命日佗びている

俗悪番組へ胎教遠ざかり

几帳面すぎる余生をうとまれる

大洲市 米 沢 暁 明

未練断ち切つて女は馬鹿でした

卒業の時季を遅えぬ柳の芽

ほめといて最後に一語釘を打ち

今治市 月 原 宵 明

梅からのストが桜へまだ続き

兵長の眼に蘇りくる軍歌

同人吟

秀句鑑賞

前月号から

菊沢小松園

半分に割って小さい方を取る

正本 水客

夫婦の場合と兄弟の場合と他人の場合と、異なつた情景が浮ぶが要は人間性の善良さを詠んで居るのに変りはない。作者自身の録画でもあろうか、奇麗な画である。

排気ガス並木も他所へ行きたかる

金井 文秋

人間なら疎開も移住も出来るが植物ではそうもならない。その住み難い条件を慥られた人間の意志に依らぬ限り移籍も出来ないという矛盾さをよく突いていて面白い。

引かれ行く牛は売られた事を知る

高橋 操子

目的は経済効果であっても牛は何にも知らない。日頃愛撫もこの日の為だと知ったら悲劇だ。それは牛には人間の苦勞を知る知識はない。予想されなかつた事に対しての驚き

と諦めがよく出ている。

押えれば愛は炎となる定め

石川 侃流洞

押えればとはぐるりからと止むを得ずが隠されて居る。そこに世の中があり、不如意がある。すべてを焼き尽す愛の虚しさ、複雑な心境をよく簡潔に纏められている。この場合下五の漢字より運命を示唆してさだめと仮名書きにすべきだと思う。

大正二桁四方八方耐えるのみ

大矢 十郎

作者の年齢ではこれで肯定できるが、それ以前の明治生れではそれ以上に耐えて来たので一層深酷だと言いたい。耐えて耐えてなお且明治生れを云々される辛さに慣らされて来たのでこの句を通じて切実におもう。

部分品接なぎ合わせて夫婦です

松下 梁水

夫婦の実態は遺憾ながらこんなものです。御互いに性格も経歴も違つた者同士、完全な融合なんか望む方が無理と言うもの、歯車の噛み合ぬところは愛情とやらで接ぎ合せて五十年、継ぎはきながらすぐ経過します。

結婚しました自然点火です

柳 楽鶴丸

旨い言葉があつたものです。自然点火、この冷たい科学用語を人間臭分々たる川柳へ移

籍した手腕が嬉しい。

三角の底で女は行詰り

木村 弥栄子

倒置法によき、語呂の運びの研究が行届いた心憎い程、適語を適所に置くのも作句の重要なポイントである。女の切つなさを三角の底へ持つて行つた技巧さを買ふ。

花もまた蝶にへつらう身のこなし

河股 緑水

またの用法がよい。またにはそれ以前が隠されている。即ち蝶の誘いがその前提にあるこの言いこなしが参考になるとおもう。紙面の都合で抽出して割愛した佳句

金バッジから俗物になりさがり

工藤 甲吉

別れきて未練沈める海が無い

小野 克枝

忘却がほしいある日の女揺れ

宮西 弥生

能面の中でシグナル出す女

河内 天笑

岡田 甫著

川柳東海道

上巻・750円―下巻・850円

待望の下巻絶賛発売、(大井川から京都まで一付・尾張・美濃の史跡・伊勢路・琵琶湖めぐり) 読売新聞社

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

橘高 薫風

背の君と妻に詠まれて撫然たり

山根 白星

倦怠期にある夫の心理、それも短歌をたし
なんでいる古女房に「背の君」と詠まれたく
すぐったさ、「背の君」と云えば俺の外の誰
でもない筈である。妻にはまだこの俺を「背
の君」と呼ぶ若さがあつたのかも思える。
この年になって俺には妻を「わが妹よ」など
とはとても云えないことだと、それが癖の頸
を撫でたのである。

ひとり娘抱くよう万年青実をつけて

堀江 芳子

おもとの真つ赤な実をおおい葉がいくつし
むように抱いている。一人の愛娘を最近嫁に
出された作者はこのように感じとられたので
ある。やはり深い実感から湧いた句は、人を
共鳴させるものだ。

あした逢う約束それから長電話

宮崎 美津子

一般に女は長電話だ。最近は子供までがそ
うで、何でも電話で用をすませてしまう。手
紙など書きはしないから文章を書く力も養え
ないでしまふと心配をする程である。あした
逢うのにくだらぬことでいつまでも電話が続
く。うまいところを捉えた句だ。同じ作者の
「再出発下弦の月はさりげなく」も良い。

平均年令六十みりん干し工場

関 美子

駄洒落ではないが、このみりん干し工場に
仲々の味がある。のんびりとしていて過疎地
的の雰囲気がよく出ている。

古い方から食べてみな古くなり

岸本 豊平次

年寄りかふた言目には冥加ということ云
い、少々酔っぱぶくなったものでも決して捨
たりはしない。だから新しく作った美味しい
ものも後まわしになって古くしてから食べる
ことになる。若い者にはそれが不思議に思え
るのだが、ご飯を捨てたりすると目がつぶれ
ると云う。若い嫁など目がいくつあつても足
りないことをやってのける。

旅人へ旅人が道問う嵯峨野

麻野 幽玄

嵯峨野というところは流石伝統ある京都の
近郊だけあつて何度行つても味わい深い散策
地で、旅人にとつても尚のことあこがれの地
だと云えよう。ところが奇妙なことに、よく
知つた道でありながら、うっかりすると祇王

寺への曲り道を行き過ぎたり、二尊院を見失
しなつたり、釈迦堂の門前へ二度も出て来た
りすることになる。「旅人へ旅人が」の措辞
が今にでも時雨の降りそうな気配を匂に与え
ていて趣きがある。

お位牌になつてゐるのに来る賀状

行天 千代

上五の表現が川柳の味で何でもないような
が、仲間非凡な言葉である。軽くて枯れた
味を読みとつて欲しい。

ローカル線初発のだけがはやつてる

吉野 志津

ローカル線が開通した。駅長の挨拶や町長
の祝辞があつて、旗を立てた機関車に近隣の
地から初発列車に乗ろうと押しかけた乗客が
あふれる。それもその日だけ、あとは元の過
疎に戻るのである。赤字線の泣き笑いをよく
捉えられた。

四季のない花屋で冬の花を買う

榊原 秀子

温室栽培が進んだ今の世の中、菊も薔薇も
年中花屋に出回っている。臭覚の発達した昆
虫には近頃の花の匂いの無さはどうだろうと
嘆いているのではないかと思ふ。そう
いう四季のうちで流石は冬、花も凛烈として
水仙のようなのが出てくる。この句のポイン
トは「冬の花」にある。意志的な冬、それが
作者の意志に通じる。例えば、受験の決意を
新らたにした日という風に。

川柳 中山道六十九次 (4) 富士野鞍馬

18 輕井沢

坂本から登り二里八町 (八・七キロ)

中山道の難所碓氷峠を西に越えて信濃路に入れば、輕井沢、沓掛、追分の三宿が続く。この辺は所謂浅間根腰の高原で、海拔九五〇m、寒氣甚だしい所である。江戸時代この三宿には給仕女、飯盛女の名目で、売女を置くことが公許されていた。中でも追分が一番繁昌した。江戸川柳はこれをみな輕井沢として詠んでいる。高崎からあるいて丁度陽が暮れる。

無骨なる傾城の出る輕井沢

(二六四)

大津絵の生きてはたらく輕井沢

(二二二)

はなやかな縮服を着る輕井沢

(二二六)

輕井沢しゃっちらこわい袖を振り

(明三仁三)

五月女をすすいでは出すかるい沢

(二三九)

芋をうんで居るのをといふかるい沢

(七〇)

輕井沢織女も交る大一座

カテウ (二九二)

どうも美人は居なかつたように作られ

輕井沢不用なものは刺身皿 鳥月 (七二二)
かるい沢膳のなかばへすすめに來

親仁氣も旅にしなければ輕井沢 武八八 (拾二二)

かるい沢ぬまたたばこのす切なり 安八仁六 (八八仁六)

そばがきへおろしを交る輕井沢 本知 (二七三〇)

食膳も美味でなかつたようである。 輕井沢おもたい夜着を出して着せ 最右 (傍四一三)

輕井沢手織の夜具はおしよく也 英雅 (八一二六)

夜具も粗末のようである。 江戸衆は数がいけぬとかるい沢 七〇 (七〇)

きぬぎぬに手綱かいくりかるい沢 八七 (八七)

馬を買程でうけ出すかるい沢 八六 (八六)

関守の折ふし通ふかるい沢 六四 (六四)

輕井沢三筋くらの安芸者 木賀 (二〇八三)

一三百文 麦飯で文を封じる輕井沢 三箱 (二四六三)

むかひ湯に來たら寄りなと輕井沢 三二 (三二)

一草津温泉の帰り 妻さくではらいなさるとかる井沢 (一九二六)

馬方に紋日を頼む輕井沢 白兔 (七一〇)

などと江戸人の想像作が多く、この外にまだ百句程ある。

19 沓掛

輕井沢から平地一里五町 (四・五キロ) 宿の入口に浅間嶽への道あり、麓へ一里半と地図にある。

浅間山は、信州北佐久郡と上州吾妻郡に跨る標高二五二二mの活火山で、磐長姫を祀る。その噴煙が昔から歌にうたわれ、川柳も煙り立つ山が日本の香炉峯 楽笑 (八九三〇)

浅間おろしに波よせる蕎麦の花 杜蝶 (七二三)

そばの花浅間の裾の秋の雪 杜蝶 (八七五)

浅間のぬけた跡かえと諏訪で聞 雨声 (二七三二)

一々に浅間山と諏訪湖ができたという 伝説

浅間を問へば雁首の煙で告 不老 (二二別一三)

小室節に「小諸出て見りや浅間の山に、けさも煙が三筋たつ」とうたわれている。

20 追分

沓掛から一里三丁(四・三キロ)その間に古宿、かり宿、諏訪明神が地図に見える。

中山道と北国街道との分岐点で、諸大名の参勤交代や旅人が輻輳して、「宿よし出女あり」と図会にある。

追分はまたをひろげて道を聞き

(拾二五)

追分で縁切木曾へ付け登せ

笹纏(一一二四)

錦糸(二三一三)

追分の茶屋愛相も右左り

さらしなは右みよしのは左にて

月と花とを追分の宿と刻んだ石の道標がある。

21 小田井

文学の

高鷲 亜 鈍

文学の町仮初の町見失う町
住みよいが文学の町眠たい町
カップルの若い額に秋の天

追分から一里十町(五キロ) 駅内二町ばかり、多く農家にして旅舎少し、宿悪し、東の出口に薬師堂あり。

22 岩村田

小田井から一里七町(四・七キロ)

駅内の町五六町あり、善光寺への道あり、内藤美濃守(一万五千石)の領地也。商人多し。

23 塩 灘 (しおなだ)

岩村田から一里半(五・九キロ)

駅内三町ばかり、入口に滝明神あり。

24 八 幡 (やはた)

塩灘より二十七町(二・三キロ)

中山道で一番短い丁場である。八幡宮があ

るので地名になつてゐる。

25 望 月 (もちづき)

八幡から三十二町(三・五キロ)

東の山上に望月遠江守の城跡がある。

望月の里は、望月の牧といつて、古来信濃国の歌枕として詠まれ、名高い馬の産地であつた。その馬を朝廷へ献上するとき、逢坂山で「駒迎え」が行なわれ、逢坂の関の清水に影見えて

いまや引らむ望月の駒 紀貫之

など古歌が多く詠まれてゐる。川柳も

駒迎えいけふや引らん月毛馬

佃(二三四別35)

駒むかへ帯の仕やうが気に入らず

(武七22)

雲雀毛も雲井に登る駒迎

竜舎(二五八6)

がある。

老の病みどうしてくれる暮の貧

廢品回収己れも一緒にとつてくれ

灯しては消しては点ず朝のみ光り

老犬が居つく場所なき年の暮れ

スカタンにスカタン重ねて六十五

老犬に善意をみせる路次の人

死に場所と決めて十年路次に住み

色紙書いても札に交らず

寒波緋々諸刃引つ掲げ

老犬は又も追われてあてどなく



北川春巢選

島根県 谷 岡 芳 枝

ナイロンの髪をかばって角かくし
信念をくずさず爪に灯を点じ
取り返しつかぬ過去を聞きたがり
春や春歩けぬ足のひとりごと
たとえばの話も娘にけむがられ

島根県 堀 江 芳 子

倦きもせず夫婦善哉小さく生き
夕陽吸い込んで音なき地平線
子を待つ灯あかり要らない夫が入れ
ぶじ暮れて夫婦茶碗の丸さかな
うつむいていても白百合香を放ち

東京都 山 根 白 星

縁日でねだったころのアセチレン
人妻と歩き寄り過ぎ離れ過ぎ
形而下のことも教祖のよく通じ
越境の子の背に重いランドセル
五感みな虚飾に疲れ切る団地

青森県 荒 田 つ る

人生は秋のお寺と親しくし
放浪の旅は果てなく荷をまとも
物知りが多くて事がはかどらず
越中も消耗品のひとり者
食いしばる歯もなく傘にぎりしめ

和歌山県 ふきあげ 虎 城

詩情未だ沸かず味付けのりと酒
不言実行妻の旅程にスキがない
表情をかえて良心閉じている
夢託すのに早やすぎる子の器量
雛の灯をつけて素顔をのぞかれる

大阪府 堀 口 欣 一

飛行雲一直線に花の春
思ひ出は塚が燃えていた芦屋
悲しみは手真似で話す子の笑顔
老人の眼に老人がよく目立ち
共学の風船ガムを鳴らし合い

今治市 今井松花

クラス会どう見えたとおない年
人様に寄付割り当てる良いプラン

離職者の自衛はケチを心掛け

女子大出横坐りして座を勤め

良い嫁の足らぬところは笑わない

鳥取市 両川洋々

春春春 医者も列車も街も混み

記憶力落ちたが酒の手は上がり

失意の日つづいて縫い娘の針が錆び

年金へ賽銭ほどの金を呉れ

樽にもめげず形見の子を育て

岩国市 村井西合

ここからはあなたの知らぬハーモニー

耐えさせるそのひと言にすがりつき

愛される不自由嫁ぐ娘に伝え

無意識に探すほんとの青い鳥

島根県 榑原秀子

花冷えに足袋の白さが痛いほど

シャンペンの音よろこびへ飛び上がり

庖丁をほめてから乱れゆく祝い酒

倅せにあやかる花をわけてくれ

竹原市 三宅不朽

排気ガス峠のどこにもない旅情

せせらぎの身ぬちを洗う闇もよし

母乳捨て保つ美貌がなんになる
無理をすなすまいと思えど物価高

和歌山県 垂井千寿子

父親が乗気見合いでよく喋り

家計簿に使われるだけペン哀し

次男には登山もスキーも許可が下り

相談は進まず酒がよく進む

松山市 谷のぶお

融通のきかぬわたしを息子に見

盆栽のひんまげられても芽吹く春

忙しゅうて忙しゅうて他人にはさせず

考えてみればさびしい足の冷え

今治市 真山国彦

正直なお人が髪をそめていた

連ドラの先取りをする週刊誌

石焼きの笛に女を取り戻し

金を取る女房は飯の仕度せず

今治市 原田輝親

ちよっとだけ派手なのはする貸衣裳

老夫婦小壘を分ける鍋が煮え

爪負けて貰うて琴を買わされる

おや今朝は雨垂れ春の音で居る

大和郡山市 森田カズエ

デラックスな机で孫は漫画読む

こと云うところには効かぬ按摩椅子

静脈怒張握りこぶしの震える日
刺青に氣勢そがれた注射針

姫路市 大原葉香

パンタロンホームに流行まいて行き

夜が凍て心も凍てて酒甘露

雪積んだ貨車がヤードでいたわられ

客さばき終えて孤独な改札氏

大阪市 小谷葉子

長過ぎた冬へ暖流まだ遙か

パリモード春の心となつてくる

トランプで占う土曜甘い罫

美しいお人よ唾になつて生き

今治市 泓 辺 伊津志

振り向けば真赤に燃えるお月様

髪撫でるしぐさも男しびれさせ

注射器を持ってば看護婦強くなり

和歌山市 秋 月 宏 方

鶴のよに飛んでもみたい亀の夢

口だけはまだ達者です日向ぼこ

学歴と別に億越す産を成し

岡山市 嘉 数 千代香

おちてなお椿おんなの彩で炎え

雨はななめに敗心の脊を叩く

ふる里の民話埋もれて村貧し

備前市 武 内 雅 堂

糸を引く女が待つている枯野
療養の窓辺へ鴉来て騒ぐ
共稼ぎあせらず朝のネジを巻く

弘前市 小山内 貞 男

取賄に縁ない位置であなどられ

貴婦人の会釈帽子が動くだけ

喪服きているを忘れたしやべりよう

今治市 大 本 バット

骨抜きにするが議員の知恵と見え

しあわせは金で買えぬが金も欲し

愚痴も聞き勇氣も付ける美容院

今治市 伊 藤 一 郎

半畳の城で妄想果てしなし

御署名を願った後で寄付を取り

貸衣裳脱ぎっぱなしてハネムーン

大東市 土 井 浩 輔

バーゲンの声が空から降る日和

怪獣に似た木の根っこ作る趣味

CMになるまで待てぬ夜のトイレ

鳥根県 安 達 潮 音

遠い娘へ塩鯖漬ける寒もどり

悲しみの過去あり暦はなされず

一匹狼と自負はすれども孤独すぎ

鳥取県 福 田 保 子

下積みのコンピヘライトまぶし過ぎ

子と共に練ったプランで旅にたち
落ぶれた果てのヌードでよく稼ぎ

尼崎市 中 谷 利 美

父に似たばやし漫才好きになり

悪女かも知れぬわたしの料理下手

家計簿は赤でも三度めしが食え

羽曳野市 麻 野 幽 立

咲く花で飲み 散る花で飲む四月

終電の一人になった自己嫌悪

幸せを写す鏡がまぶしすぎ

大阪市 白 石 潔

婚約を告げる息子の眉太く

本心をかくした会話間のびして

本心は包んだまんま恋終る

鳥取県 林 露 杖

幸薄き女といわれて針祭る

五月雨の窓にギターのすすり鳴く

沈黙が崩るる刹那ガスタイター

島根県 搦 みどり

いささかも交らぬ心にとげささり

転勤へ故里遠く花便り

アルコールにあおられ春の風に乗る

岡山県 武 元 柳 子

なかなか野あそびの日のまとまらず

春の風邪すつきりとせず怠けぐせ

落し物ぶらさげてある猫柳

兵庫縣 高 橋 近 江

乳飲ます間の骨休め児の孝行

春雨へ灸据え合いも老夫婦

種を蒔く明日の天気へ花だより

東京都 宮 崎 美津子

脱サラの主人応援(二句)

脱サラの見切り発車のベダル踏む

乾ぐもの乾いて好日終い風呂

言いすぎて息子の夜具をそっと敷く

豊中市 安 藤 寿美子

何故かよく腹の立つ日で日が暮れず

向え水みたいに親へサービスし

アフリカの鯛がならんで披露宴

高槻市 山 田 スミ子

結論はやっぱり年かいなーと思ひ

冗談も入れて話術は進められ

ハンドルが自然に動くSカーブ

守口市 野 呂 杜 月

三面鏡開けば花の数が増え

生きて居る手応えなるか釣の味

人と馬うなずき合って過疎の坂

大洲市 堀 内 曉 風

納得のゆかぬ話しへ念を押し

どん尻で卒業をしてもう社長

ノックする前に女の身づくろい

大阪市 阪上 十止庵

賛否両論いずれにしてもある犠牲

チャイコフスキーの甘さもの憂し老いの坂

みんなあげると合鍵がいう夜霧

鳥取市 藤本 鎮也

代人と言う気軽さでまくし立て

エネルギー不足か居眠りつきはじめ

宴会に故郷の踊りが生きていた

鳥取市 藤本 恵子

ネグリジュエニューでポーズを取って見る

手に職があつてアッサリ嫁がれず

花言葉信じ切れない気のあせり

大阪市 本間 満津子

別世帯のわけを他人が聞きながら

棄てて来た故郷を舌は恋しがり

新妻の料理は口絵のように出来

尼崎市 小林 文月

民生委員紙編集

横組みに古い委員は踏切れず

原稿の不足カットを大きくし

守口市 岸本 豊平次

こんな時にとへそくりにある理屈

館内を二つに分けた土俵際

和歌山市 樫村 ふみよ

百を越す豆を二人で取る平和

気に入ったお見合仲人そっちのけ

東大阪市 落合 思月

背の丸い妻に己れの年を知り

ピンカール老婆孫を抱きに行き

樫原市 西本 保夫

妻にまだ感謝も言えぬ平社員

まかすとけばよいのに肚の無い課長

寝屋川市 福富 隆子

感情の嵐も苦惱軟化

ひっそりと天気の話で今日も暮れ

羽咋市 三宅 ろ亭

漫才に腹を抱えぬ歳哀れ

興醒めの酒の苦みよ半ば置く

出雲市 板垣 草丘

あの世にも位があるか母思ふ

緑之助師と日御碕

書いた句が碑となる顔も癸丑春

大阪市 松をか 右 式

路地を出る花嫁夕立くる気配

棕櫚の花落ちずに腐れ妻の忌くる

岸和田市 池田 香珠夫

わけへだてなく育てても育ての子

映画みなエロで近より難くなり

三重県 川上 富子

長男出産

陣痛の波が不安をのせてくる
わくわくとする喜びは母のもの

今治市 萬本昌道

運不運背中合せに生き伸びる

硬化する妻に仕立てた子の育ち

大阪市 柳原静香

自信喪失友情の嘘美しき

嫉妬心ほのめかす程に妻は癒え

大阪市 松本市郎

燃える気がまだありエンジンの服を着る

人間不信パチンコで夜を更かし

愛媛県 小山悠泉

用意した言葉笑顔へ言いそびれ

耕耘機牛の出番がない田畑

大阪市 藤田頂留子

弘法大師像のペンダント求め身につける

四六時中我が身と在(おわ)す有難さ

のれんさえ出てりゃ売れるよに言われ

新潟県 高野不二

給料の値うちが下る豆腐の値

旅行する為のバイトはせいを出し

河内長野市 井上喜醉

マイカーを御札で守る不動尊

チップだけ現金あとは付けで飲み

青森県 波 ただお

寝台車隣の草履気にかかり
春風にはためくスカート短かすぎ

茨木市 日高文子

限界を知って女でよかったわ

中三の子と対等にするケンカ

新見市 吉田落猿

出稼ぎへ女ばかりの道普請

花嫁を乗せて機関車はずむ音

鳥取県 有田鹿の子

国鉄闘争(一句)

子を訪えば京都訛りでもてなされ

長生きをする気へ石塔出来上り

島根県 東原福子

ささやかな余生に希望を失なわず

空白を埋めて晩鐘たそがれる

鳥取市 大塚豊生

一生の妻と決めるに一目惚れ

金婚の道通り過ぎ過疎守る

和歌山市 島本泰子

雛祭狭さ忘れる唄流れ

老夫婦角とれすぎた会話あり

米子市 増田竹馬

雪の日の裸祭りに湯気が立ち

ドッグ入り分解掃除して使い

煮え切らぬ男に男の腹がある
共稼ぎ愛の言葉に引きずられ

竹原市 古 江 雅 鳳

豊橋市 鎮 浪 翠 月
勉学に励みながらも恋すすむ
保育園ミニで迎える幼な妻

大阪府 平 井 露 芳

NHKドラマ「国盗り物語」

改名の度に道三出世をし
休耕田案山子も共にほっとかれ

寝屋川市 江 口 度

貧乏ゆすりしてる社長に気もほぐれ
インフレの雪ダルマ押す商社マン

今治市 古 野 伶 人

修養が出来たお方で取り合わず
背伸びしてあばらの骨の音を聞き

宿毛市 山 本 窓 花

仲人へ子の風上げにと案内状
暖冬へかけ足で来る花便り

堺市 栗 本 藤 持

家計簿の楽しみもなし物価高
老の身を励ます声ぞ朝の鵪

名古屋 大 林 曲 心 手

子に譲る聖書手垢の泌みたまま
晴れ姿父の涙を見てしま

貝塚市 行 天 千 代
雛祭り主役は哺乳ビンで遊び

孫進学
合格へ片眼のダルマもうれしそう

大阪府 新 川 貞 祐

他人は優雅と言う孤老の2DK
足から降る雨奥駆けの行者道

氷見市 有 磯 涙 月

通貨より物価が恐い庶民層
定年制玉石共に去る職場

和歌山市 原 庄 治

吹付けのシンナー臭い悪友想う
俊工だ俺の生きていた証拠

呉市 佐 久 間 文 明

店頭で福寿草が春を呼び
ローカル線駅長のんびり手をあげて

須賀川市 平 栗 金 太 郎

昔兵隊今出稼ぎにとられ行く
平和でも交通戦争ゴミ戦争

仙台市 川 村 映 輝

国宝の杉も公害には勝てず
老化現象昔の記憶だけ残り

鳥取市 藤 本 和 宏

夜を稼ぐ女の昼寝を起こすべし
金のあるうただけ財布持ち歩き

鳥取市 藤 本 佳 女
金がある日本に貧乏のある不思議
新聞は文芸欄を見てるだけ

大阪府 鈴 木 生 仏
豚小屋の上に咲いたる八重桜
八十をすぎて継ぎ木も孫のため

大阪府 木 村 渥 水
ピラを貼る青年夕陽を着て帰り
和服の娘着せる苦勞に着る苦勞

大阪府 花 田 繁 子
おしゃべりが無口の友と馬が会い
お値段を読んで目をむくさし向い

大阪府 河原林 比呂路
腹案もなく反対をしてるだけ
なにわ節聞いて我が身の薄情さ

鳥取県 福 田 陽 山
酒の無い宴会ジュースが肩並べ
寝屋川市 井 上 武 松

泉佐野市 大 工 静 子
歳老いて日日さいさいの無事を知り
娘の心のぞくに過去の邪魔があり

岡山県 沼 本 美智子

海の面も我が心も同じ雨の日は

鳥取市 佐々木 静 泉
美辞麗句嘘でもいいさうれしい日

鳥取県 大 坪 天 涯
平熱が続き熱いの鶴を折り

大阪府 岡 本 まさひろ
色シャツがホワイトカラーを襲名し

鳥取県 岩 田 三 和
夜ふかしは明日に響かぬとこで寝る

大阪府 内 藤 ますゑ
ぼかぼかうきうき野路をぶらぶらり

大阪府 吉 野 志 津
南紀春三寒四温みなたのし

大阪府 村 島 秀 村
ヒナ段にあなたかざってながめたい

大阪府 須 浦 つ ね
核家族娘の子を羨まれ

大阪府 広 畑 賛 平
暖冬に盛りの早き梅だより

★
▼前号訂正
ヒン曲げて折りたいノッポのビルが建つ

土 井 浩 輔



小松園氏を語る

若本 多久志

死ぬ程のうしろ姿と思わざり納棺へ独歩バイブル竜ののみをつくしの鐘も空しく響くのみ

これは昭和二十九年十二月、小松園さんが三女、寿々さん（釈尼妙修）十六才を亡った時の詠嘆句で、川維三四七号川柳塔（路郎選）に載せられたものである。

まことに、愛児を亡った悲しみは、一度我が子を失ったことのある親のみが知る深い、深い悲しみであり、亡き路郎先生もそのことを、私の上梓した句集「親ごころ子心」の序文で述べられ

子を死なし学校に子の多いこと 路郎の句を寄せておられる。私も幾歳か前に同じ悲しみを味わされた親の一人として、その胸中を拝察し、お悔みの句を添えて「愛児の想い出」という本を贈ってお慰めしたのであった。

そのご返事を頂いてから、小松園さんの人間味に魅せられての交際が初まった訳である

が、以来、淡々として十八年間の交友がつづいている。

その後、拙息の嫁がしに何人かの女性とお見合いをさせたが、いずれも「帯に短し、たすきに長し」で困っている時、ふと亡き梅里さんから「小松園さんのお嬢さんを」というお話があり、実に灯台元暗しのたとえの通りで、兩人とも一発のお見合いで意気投合、梅里さんのご媒妁で目出度く結ばれることになり、小松園君多久志は、柳友から親類としてのおつきあいになってしまった。

三国一の花嫁という言葉があるが、このご息女、なかなかの出来ぶつで、さすが京都の公卿さんの血を引くという小松園さんの、大らかな教育が、その人となりを創ったものと思われる。

その上、奥さん初め、各息女達にもそれぞれ、みやびやかな趣味をもたせることによつて、心の豊かさを養われた点、全く頭の下る思いがする。

柳歴は五十年ということ、老いたりといえ、本社句会を初め各地句会でも、胸にこたえるような名句を創る、その才能と情熱は、路郎門下の四天王とまで言われた所以でもあらう。

とにかく彼は居職の關係で、自分の家で仕事の手を動かしながら作句出来るという、好条件に恵まれているので、毎日八時間から十時間ぐらいい、作句三昧に没入出来ることは、誰にも真似の出来ないことである。

先達も三日程で「鬼百句」を作り達筆で巻紙に書いてくれたが、只々驚嘆の外はなかつた。

彼が子煩悩であることは私との共通点だがせつかな私と、おっとりした小松園さん（ニックネームを「閉会の辞」と言われ、何の会合でも、済む少し前に現われる）は公卿の出と貧乏百姓の出との違いで、致しかたもないことである。

因に普通、夫婦が一緒に外出する時、待たされるのは夫の方と決まっているのに、彼の場合は奥さんの方がその被害者であるのも、ほほえましい菊沢家の家風であらう。

又、至って話好きな点も（多少迷惑してる人もあるらしいが）彼の好人物を象徴しており、話の中に得意即妙のシャレを飛ばして、面白く聞かすテクニックは一流のユーモリストであり、玄人の落語家もハダシというところである。

ああ神よ、円熟の好漢菊沢小松園に白寿の命を恵み給えよかし。



八面玲瓏

多久志さんを語る

菊 澤 小松園

尼崎日産自動車株式会社代表取締役―若本真彦氏と言うより私にはやはり川柳家若本多久志さんの方が親近感があり、よりその人に似合うように思う。

時代の脚光を浴びた自動車に身を起され、時運に恵まれた環境の中に、粒々辛苦の研磨の結果今や功成り名遂げられて、一種独特の落着いた物腰は近代流行の派手な人目を引くゼスチャーは無いけれど、煙製されたいふし銀の重厚な人柄。

川柳塔創立の重鎮の一人として対外的対内的にも此の上もなく不可欠の人と思つてゐる。決して平素は多辯な人では無いが一度口を突いて出れば懇切丁寧、満足の行く結果まで説かれるあたり、さすがに経営畑の人である。何時も感心している。八面玲瓏き抜かれた人格である。

尼崎ライオンズクラブ会長として多年の活躍は無論名士として高く評価されていられる。半面、近來は御自身の体験から左利きの友の

会西日本会長としてラジオにテレビに出演されて異色の社会活動を続けられて居る。

茲うした多忙な社長業の傍ら川柳活動もなかなか熱心で毎月多くの佳吟を発表されてゐるこの二足も三足もの草鞋を自由奔放に踏みその超人振りに時には四辺の人達がはらはらすることもある。

如何に頑健とは言え古稀を過ぎての御年齢から考へて余りにも多忙に過ぎはせないかを憂うるのである。

多久志さんは大阪に生れて幼少の頃御両親を亡くされ少年時代から加賀金沢市に人となられ他日を期して独学独行克苦精勵若冠すでに囊中の針はその鋭鋒を現わしていたのが金沢パスの社長の囑目する処となり、乞われて後その一翼を任されるまでの信任を得られた。其の頃よりすでに非凡であつたのである。

多久志の号は嘗て大阪桜タクシー社長時代に付けられた営業を文字られた雅号である。

タクシー社長を罷められた時、改号のことを路郎先生に相談されたこともあつたそうであるが、先生の御声で古い雅号なのでそのままにされたと聞いている。

三等がよいとおふくる困らせる 多久志
―ユーモアの何たるかを示されて居る近頃背伸びした句の多い中に平凡さの非凡を見せ面白、多久志さんの横顔である。

買収はされぬつもり 多久志
―人間のざるさも多久志自身の生真面さも窺える、此の種の人達が増えれば毎日の新聞の三面も明るなるだろうとおもふ。

尚多久志さんの長男芳彦、小松園の二女百合、は夫妻であり媒酌人は故松江梅里さんである。

多久志さんの著書に、
「揭示訓」というのがある。全社員の座右の書にした、教育課からの提案や他の社長さんの願ひなどで編まれたものである。
まずその巻頭に、

社 是
社 訓 実

一 常に夢をもち
二 和を貴び

三 仕事に情熱をそそげ

とある。まことに多久志さんらしい。そのほか「親ごころ子心」「老いの坂」の句集から「凡愚のたわごと」の随筆もある。外遊も数回というからうらやましい限りである。



女子高生の憧れ

—川上大輪のこと

大矢十郎

大輪と娘の富子を結びつけたのは川柳か、

あるいは体操なのか、それともその他の何かであるのかはつきりしないが、親の耳には川柳以外の対話など耳にしたこともない。富子のロマンチックな句は、父として嬉しく見守るだけであり、何も言うことはない。又大輪を讀めるに言葉は惜しまない私でもある。

彼の弟の純滋君が、新宮体操クラブの会長をしていての關係で時々補佐に出かけているが新宮からの勝れた体操選手の進出を目指して指導している。体操と言えば彼は高校時代、県内選手権を所持し、日体大時代は大学選手権優勝という栄光を担っており、メキシコオリンピック予選には鉄棒の八三回転宙返り降Vという世界体操界初のウルトラCのCを實現し関係者を驚かせた。責任感の強い彼は猛練習を続けているうち、予選終了直前にして着地に失敗し、骨折に見舞われ、オリンピック出場は夢は破れたのである。しかしこの負傷があればこそ現在の彼らのゴールインを

見たのかもしれない。

僕だけの足跡残す道を選る 大輪

何事も生暗りをしない彼は、やりかけたら、その域に達するまでやり遂げる斗志を秘めている。書道二段、英語、そして絵画、ギターと私の四人の娘達にとっても、又とない家庭教師として重宝な婿であり、その上、柔道二段という男性的な魅力は、女子高生の憧れの的である。そんな武者である彼に、無理かと思いつながら勧めてみた川柳を気持ち良く同調してくれたことは、忘れられない嬉しさの一つとして心にのこっている。この頃から私も妻も密かに婿としての意識を持ち初め、毎日、評価に余念がなかったが、結局ゴールインまで、いや今日まで、彼の欠点を見出す事が出来なかったのである。

雑音のひとつに僕の生きる声 大輪

着々と物事を成し遂げていく彼は、決して目立つことなく自分の功績を人の功績とする、そんな豊かな心の持主である。それゆえ、彼

は、校長や教頭に可愛がられるのであろう。時々「うちの娘に、こんな婿さんが欲しい」などと世間並みで、ドキッとさせられることがあるが、言葉はみな夫であってくれればそれでよいと思っている。

妻の目の届かぬ距離にあるスリル 大輪

真面目一点張りマイホーム型の下戸である彼にも、教師同士の交際もあり、ちょっととした事が、大きなスリルとなる純真さは、嬉しい限りである。小誌みかんの発行を思い立った時、喜んで力付けてくれたのも大輪、富子の二人だった。以後編集と印刷、発送とも大輪が一手に引受けてくれる。製本位が私の手伝える仕事で、句会が終わるとこんな苦労が待っている。しかし、こんなに楽しく家中で談笑のうちに、はかどっていく。これも川柳塔社の諸先生方の暖かいご支援と葵水、大茂津両先生の昼夜を分たぬご指導に報いる心意気が、そうさせてくれるのである。この原稿を書いている間に、諸先生方から、三月十七八日の新宮吟行の礼状が楽しく溢れそうな文字でたくさん投げこまれました。心から楽しんで戴けて、本当にこんな嬉しい事はありません。誠に至らぬ接待を何卒お許しの上、又のご来新をお待ち申し上げます。大役を果したような気の休みも二日程、私も大輪もまた次の課題に取り組んでおります。新築、そして出産にもめげず、川柳の勤めを果たすための大輪。私はもちろん彼が大好きなのである。娘より射られた馬がいて嬉し 十郎

時として娘よりいとしい婿であり 同



わが師わが父

川上 大輪

「川柳をやってみませんか」と傍らの柳誌を開いて話始めた。初めて十郎氏宅を訪ずれた時である。その口調たるや全くユーモアで相槌を打っていた私もその口調に思わず返事をしてしまった。私と川柳の出合いである。以後句にもならないものばかり作っては通うようになり指導戴き現在に至っている。

つて開けると鉛筆を持って柳誌にとらめ版といった氏の姿がいつも眼に飛び込んで来る、私が来ていることもしばらくしてからでないと判らないこともしばしばである。句を考えている時や、句の話になると他の事は一切聞こえない便利な耳？を持っていて、氏の長女富子との結婚の話でも、つつい川柳のことになってしまい、式の日取りや準備、打合せなどは川柳のついでに話をするといった調子である。家の会話にしても句が主で、何でも五七五にしてしまう。聞いて楽しく、本当に日常生活イコール川柳であることを痛

感させられる。

昨年の夏祭りに行った帰りである。いつの間にか十郎氏がいなくなり、あたりを探していると、面を売っている店の面から顔を出してこちらを呼んでいる、その表情が何とも滑稽で帰ってから家中大笑いであった。家に居ては末っ娘に悪戯をして叱られているユ一モラスな姿から

雑布が乾いて愛の破局来る 十郎
と言った句は全く想像がつかない、家にはいつも笑いがいっぱいである。親子の断絶が言われている現在、大矢家に関しては全く無縁の言葉である。本当に

お早うさん言うて悔なし人違い 十郎
の句のように温和な幅の広い人間である。十郎氏の口癖は「新宮には柳人がいない」である。私が初めて新聞柳壇に入選した時は、まるで自分のことのように囁こんでくれた程である。吟社創設にしても一人でも新宮から柳人を育てようという氏の川柳に対する熱意

と人柄から、一人増え二人増えさやかながら句会を開き、地方の新聞にも句会案内や入選句が発表されるようになった。永年町内会長をやっているのも氏のそういった人間性、人柄が町内の信頼を集め高く評価されているのであろう。一見のんびりしているようだが、思い立った事はすぐ実行に移す、責任感の強い氏である。先日の新宮吟行の際でも旅館の手配、車や船の手配全て氏一人でテキパキと片付けてしまった、全く驚くほどの行動力である。吟行の話を聞いた市長からも賞品、賞状を出して戴き続いて市議長、教育長からも賞品等を出して戴き、これも全て十郎氏の顔の広さである。しかし人前に出るのはどうも苦手らしい、人前で挨拶する時などは大変らしい、前日何度も練習しているようである……が仲々、どうして、どうしてである。不思議な事に十郎氏も私はまるでダメである。いつもお酒ならぬお茶で乾杯である。共に安上りに出来るらしい、私にとって良き父良き師である。

▼同人消息—久家代仕男氏から一日御師の尼師の句碑は観光客からも好評とのこと。
大江秋月氏から—第二十六回大鉄文芸作品集で川柳の部一等になったと。山田季賛氏は四月八日救急車で大阪鉄道病院へ。これは二年前の病気が悪化とのこと。二カ月ほど休養することになりそうで、入院中は川柳を楽しみますと。(大阪市阿倍野区南一の三一五、大阪鉄道病院三階)



最高の婿どの

不二田 一三夫

敗戦数年後、これまでなかった勝山小学校の校歌を書く機会を得た。ぼくは鶴橋小学校に四年生までいたが、当時から人口が多かったため第二、第三、第四と、この勝山小学校は第五鶴橋小学校といった時代があった。この小学校に弟妹四人と娘三人が学んだので、どうしても公募されたこの校歌をボクのものにしたかった。(同校の初代PTA会長は本社同人飛田好一氏)弟妹四人と娘三人分と思

い、実に七篇書いたものだ。そして候補作三篇残ったのだが、そのうちの一篇は同校の先生で詩のうまい人だった。あとの二篇は拙作で、率からいくとボクが有利だったが、採用は一篇なので、学校の先生の作に落ちつくだろうとあきらめていた。

作曲を関響の朝比奈隆氏に依頼していたのが氏の北海道演奏旅行でダメになり、NHKの上野山正男氏に代わり、候補作三篇を作曲者に一任することになった。これらの情報を愚妻がPTAに関係していたため学校の若い

二、三の先生がいちいち知らせに来てくれた。そのなかに河井庸佑がいたのだ。拙作に決定したときも彼が一番に知らせに来てくれた。その後もマジシャンに拙宅を使ったりしているうちに、長女の甫瑛子をくれと云い出した。彼には両親もいないし、きょうだいもないという、嫁にやるには最高の好条件だから「よし、きた」と二つ返事でやることにきめた。

酒、タバコをやらず、無口で実直で、生まれがいいせいかわポンポン(坊ちゃん)タイプで、誰からも愛される型で、今でも川柳仲間にも評判がいい。

ボクが標語をやっていたのでスグ標語をやりました。現在の「かたえくば」「や」「USO放送」などの三行コントは、このスタイルを創ったのがボクたち「コント集団」なので、彼も三行コントをやり、ボクが川柳をやっていると川柳をするというわけである。いようなれば女婿ではあるが愛弟子でもあるのだ。

「川柳雑誌」時代から今日にいたるまで、句会の清記をやってもらっている。七日に句会があるとその翌日には清記を届けてくれるのだ。まことに人使いの荒いボクだが、編集という仕事はスピードが要求されることを徹底させているのである。(他人にはこんなキツイ仕事は頼めないが)

「お父ちゃん」と仕事を組むとエライよ。いっぺんでもイヤな顔をする、二度と仕事をさせてくれないから、よく考えてから引き受けなさい」と、娘が忠告したそう。

自分のことをいうのもヘンだが、ボクはものを頼まれると、イヤならその場でことわるし、OKなら万難を排してもやりとげる主義なので、裏と表のハッキリした人でないとモノは頼まないことにしている。彼はそういう意味で常任理事にも推せんしたし信頼のおける一人でもあるのだ。

一男一女があつて上はことしと上は来年度高校と苦しいだろうがマイホームも持ち娘も幸福である。いい婿を得てボクも幸福だ。典型的な好人物だけに句にはきびしさがな

いが、さすがに学校物の句には見るべきものがあるようだ。

運動会わが子ばかりを追うカメラ 庸 佑
長かった短かかったと夏休み 同
右の句は故梅志さん「秀句鑑賞」に拾われたものだが、こういう句を作らずとたしかにうまい。——ボクが編集担当しているかきり、句会の清記から彼は逃避することができないのは気の毒だ。



山は富士山

標語は不二田

河井庸佑

不二田一三夫氏とわたくしとの出会いは、昭和二十六年であるから、今から約二十年前ということになる。

一三夫氏には、三人の娘がいたが、わたしはその長女と結婚。そこで義父、娘婿という関係がうまれた訳である。

長女を嫁に出し、続いて二女、三女と子どもは、全部嫁がせて今は夫婦ふたりきりの生活である。いくら時代が変わったとはいえ、三人の娘を、ひとりも残さず全部出してしま

い、わが姓は一代かぎりそれもよし 一三夫と、しごくあっさりしている。成長した子どもたちの意志を尊重してやり、みんな思い通りに、相手を見つけて出ていくのを見送ってやる理解あるよい父親でもある。

義父にはいろいろなエピソードがあるが、まず、標語を作るのと右に出る者がないといふかつての標語作家日本一ということ、一山は富士山 標語は不二田。という標語があっ

たくらいである。戦後、いま住んでいる家主が買うてくれ、というて来て、月賦で買うことにした。それを二年ぐらい標語の賞金で全部すました。また、娘の結婚もいろいろ持たせたが、ミシンや何やら賞品でもるものが多かった。あのころ、うちで賞品でなかった品物はたたみと、ふすまと水屋ぐらゐのもの。時計、万年筆、ライターどれも十か十五はいつでもあったと話しているのを聞いたことがある。

また、新聞に出ている三ミリコントを作る腕の方もたいしたものである。朝刊・夕刊に出ているあのわずかの文字で、世の中のものゆりの様子を鋭く観察し批判して風刺するコント、Y紙朝刊のUSO放送局には、相当熱がはいっていた。これは関東、関西その他の優秀な作家が多く、なかなか掲載されない。これも毎月載っていたベテランであった。毎日一編、月に三十ないし三十一編、その中から月間賞一編、月間賞十二編から年間賞一編

(最優秀作品)と選り出される。これにも選ばれる作品を創り出している。新聞社のお抱えで、「ウソ横丁」など関西の優秀作家で作られているグループのリーダーでもあった。川柳については、川柳雑誌以来の活躍、読者のみなさんは、よくご存知のことと思いますので、ここではふれないことにします。

つぎに、漫才の話にうつる。このほうは、昭和四十年頃より台本執筆の仕事がはじまった。もともと書くことについては、かなりの自信はあったことであるが、はじめてやるこの仕事に取り組むには決心がいったと思う。しばらくたつと、漫才の大御所秋田実生に見出され、一流漫才師の台本をも手がけるようになり、テレビ、ラジオに作品が顔を出すようになった。また秋田実主宰雑誌「漫才」発行の仕事にも加わり、編集長稼業に執筆にいそがしい毎日となってきた。ユーモアあふれたこの漫才誌も好評であったが都合で今は休刊している。一日も早く出してほしいとあちらこちらから望まれている有名誌である。川柳雑誌にも寄席に関する句が毎月発表されている。寄席の世界のいろいろが、書かれているが、台本を書いているものでなければ、またはこれに精通していなければ書けない内容をもりこんだものばかりである。

最後に、寄席の句を二、三紹介して終わりといいたします。

笑つてるのは高座の二人だけ
一人になれば芸人目を伏せる
寄席囃子こども食うか食われるか



麻生路郎選

「童謡の森」

福田 丁路

五色の紐を
杉や松の
お枝にかけた
お日さん

おはよ
谷のおばさん
こんにちは
かあいや
めじろの
ごあいさつ

昨年の本誌五月号に、香川酔々氏が「路郎の俳句」と題して、麻生路郎編「大正傑作志蕩句」という俳句の句集を偶然京都の古書店で入手され、その中に先生の句があった事を書いて居られる。

ところで自分もそれから暫くして、横浜の古書店が「日本古書通信」に出した広告に、『童謡の森 初版 麻生路郎 大一 一六〇〇』とあるのが目に留った。

路郎先生には民謡、童謡の作家として知られた詩人野口雨情氏とも交際のあった事は酔々氏の文章で知ってはいたが、童謡についての著書があるとは夢にも思わなかつた事で、同名異人かとも疑ったが、兎に角送本してもらった。

そして発行が本誌の前身「川柳雑誌」創刊の二年前、即ち先生三十四歳の時の紛れも無い先生の著書である事を確認し、思いがけぬ稀観本を得て若き日の先生を目の当りに見る思いがし、早速その喜びを八木摩太郎氏にお

伝えした訳である。

ここに「童謡の森」について詳しく述べた様の参考に供したい。

① 大きさ 縦一五cm 横一一cm

② 表紙 上部横書二段 路郎選集 童謡

の森 下部犬を連れて一人の少女が花咲

く野道を散歩する絵が裏表紙に続く

③ 表紙裏 色刷オモチャの行列

④ 中扉 上部二段横書 童謡の森 麻生路郎選 下部二段横書 田村書店出版

一九二二

⑤ 序文 中扉より一枚置いて四頁に亘り

終りに 大一年春 萩の茶屋の遅日荘

にて 路郎生

⑥ 童謡 又一枚置いて目白が数羽木の枝

に止ったり飛んだりしていると絵と、左

記のような色刷無記名の童謡がある。

お日さん

きれいな

⑦ 本文 又々一枚置いて縦書 路郎選集 童謡の森 その裏から本文二〇〇頁に亘り終りに 路郎選集 童謡の森(終) 西曆一九二二

⑧ 目次 本文最後の頁から一枚置いて一七頁に亘り、最初に 童謡の森 目次

とし 童謡題名 作者名 頁

⑨ 奥付 縦書 大正十一年五月十日発行

編著者 麻生路郎 発売所 大阪市東区

心齋橋筋南久太郎町北 熙盛堂 田村書店

序文で先生は九分九里までが少年少女の作品で、ほんの僅かだけ専門家の作品と述べられ、野口雨情氏の名も見られる。

問題は前記の目白の童謡で、これのみに作者名が書かれていない。自分としては先生の作ではないかと思っている。

なお伊藤蔵書の朱印が、目次最後の頁の裏

に押されている。

新「猿蟹合戦」

室山 三柳

家に風呂がないということとは不便ではあるが、一面、親子で行けるという楽しさもある。長男(高一)・次男(小四)と一緒に湯槽につかりながら、あるいはまた、カランの前に一列に並びながら、駄洒落を飛ばし飛ばししゃべるのも、貧乏人ならではのしあわせかも知れない。

その浴槽で、(この日は彼一人だった)次男が、「お父ちゃん、演出て、どんなことすんにゃ。」といひ出した。わたしはこれでも勤務先では、演劇部並びに文芸部の顧問である。おもむろに、彼が理解できるように「演出」の説明をした。と、「演出で、そないむつかしいのやったら、ことわるかなあ。」と急に元気がなくなったようである。

事情を聞くと、(小学校では、一、二年・三、四年……といった風に、担任がいわゆる持ち上がるのが通常であるから)この三月のクラス解散に際して、男女別にお別れの劇をするのだそうである。(一学期ごと改選、重禁止のため)三人の元・前・現の男子の学級委員が集まってジャンケンをしたところ、元委員の彼が負けて演出者ということになったという次第である。脚色はクラス男子全

員で、「猿蟹合戦」をやるといふ。もつともそのあとへ「異聞記」とつけたらよさそうなお内容で、蜂と臼と栗が蟹の仇討をした後、猿の仲間のお礼参りがあるって、お伽噺の正義の方がやつつけられるという筋書なのだそう。

この子はちよつと変つた子で、怪物ものやヘンシンものを好むことや、流行歌を歌うことはまずまず普通としても、「般若心経」・「重誓偈」・「十句観音経」・「普門品」などを仏前で唱えし、「阿彌陀経」も、父母の命日などにわたしが上げていると一緒に上げたりする。第一、仏壇の掃除はいつの間にか彼の分担になってしまつてゐる。それに落語、漫才の類が好きで、特に落語はラジオ・テレビのみならず、わたしの持っている本を引っぱり出しては、片っ端から読みふけている。更には歌舞伎の声色までソノシートをかけては暗誦しようとする変り種である。

とはいへ、この悪がするやがて滅ぶ式の「猿蟹合戦」を小学校の四年生が考え出したのには、さすがの演劇部顧問も弱つてしまつた。戦前、といつても少年時観た映画に「海を渡る祭礼」というのがあった。島に年に一度の祭があり、例年の通り香具師たちが島へやって来る。ところが、同じように島へ渡つたやぐざたちが、いやがらせと暴力で彼らを困らせる。弱者たちの味方としては一人の若い浪人がいるのだが、この浪人何を考えているのかいっこうに悪い連中を懲らしめようとはしない。自分に気のある宿屋の女中(この

年増が市川春代)が、目の前で彼らに引つかつがれても、知らぬ顔で耐えている。が、遂に彼は立ちあがる。といつても、超人的な活躍でバツバツと切り倒すお定まりのチャンバラがあるわけではない。彼は理を説き、そして数人のやくざに囲まれてどこかへ連れ去られる。あとには祭礼や興行ののぼりがはためいている。

それだけの話である。観客の眼には、その浪人は立ち廻りの果、殺されるのではなからうかという想像さえさせられる映画であつた。もつとも、戦前と書いたが、戦後しばらく米軍によつて抜刀しない映画を作らせられた時代があつたから、(刀を持たない鞍馬天狗などがあつたりした)その頃の作品かも知れないし、わたしの記憶にも間違いがあるだろうが、最後の場面が印象的であつたことを覚えてゐる。ともかく、勧善懲悪ではなかつたように思う。

小説や劇・映画では右のようなストーリーもおもしろいが、小学生の劇ではこれは問題である。そこで(一日おいた)次の入浴時にもう少しくわしく聞くことにした。

子どもというものは、ありふれた形をいやがる。たとえ冒険でも新奇なものをお好む。次男のクラスの「猿蟹合戦」は、猿がおむすびを持ち、蟹は木登り蟹で柿の種を持っているという設定である。おむすびと柿の種との交換があつて、猿が柿を育てる。実が熟すころ猿は病気になる。折よく蟹がやつて来たので実をとることを頼む。蟹が自分ばかり食へ

るので猿が催促すると、「これでも食べろ」と青柿を投げる。ところが猿がうまく投げ返したので、蟹は死ぬ。蟹の子と栗と蜂と白と(それに)杵(を追加)が、蟹の仇を討つ。猿仲間が集まって、病猿の行為を正当防衛とし、蟹たちが祝宴をやっているところへ押しかけ、蟹たちをあやまらせた上、やっつける最後の「やっつける」はどういうつもりかわからないが、子どもらしい発想である。しかし、原話のように簡明でなく、何か現代の社会がうつされたような気がする。わたしが最初聞いた時ほど憂慮すべきものではないにしても……。

昨年六月号に「先生」漫筆に書いた路次裏の借家も、環境問題と子どもの成長のため狭くなって来たので、ぼつぼつ低家賃と都市の中心部の便利さを主張することによってがんばって居られなくなってきた。この問題は、二年前から妻子から解決を迫られていたのだが、先立つものごとと、「日に新たなり」の価格の急騰ぶりに、みすみす不動産業者を肥えさせるのがいまましく、目を皿のようにして新聞広告に見入る妻の窮追をノラリクラリと躲していたのである。が「百聞は一見にしかず」とりあえず話のあった宇治の三室戸をたずねてみることにした。蛇足を加えるのも、これはプレハブ住宅と土地もその会社のもの、設計変更おことわり、三月から二割高、そして話のあったのが二月二十三日、二十四日には競争者があらわれたと

いう電話まである、という念の入れようである。二月二十八日でおしまい。いかに腰の重いわたしでもなるとかせざるを得ない。二十五日の日曜日を利用して家族一同久しぶりの外出である。結局ここはスペースと周囲の関係で断念、(一年以内に建てること条件の)宅地を見に小倉(巨椋池の干拓地)へ出かける。値段と駅からの距離の遠さに、これまた断念。帰路、寒風に吹かれながら、長男と次男は歌う、

へなぜにお前は家を建てない。一文のお金もない。この俺たちに。昨日もむなし、今日もむなし。そんな生き方しかできない、いつになったら家を買うのか、お前の名は三柳。(最後は本名でもよい由)

——ご存じ「地獄の辰」の節で——
最後に廻った山科の建売住宅は、いままでも控え目だった長女(中一)も乗り気だったが帰宅してから図面を前に検討してみると、やはり狭い。前二者に比較すれば価格は無理をすればなんとかならうが、まず架蔵書を入れる場所がない。

それにしても、父親が自己の勉強部屋を必要とする家族は、少なくとも住宅問題についてのみいば不幸である。

また、いかに安月給とはいえ、四十も半ばを越えた男が全額借金でなければ家も建てられないというのも何か納得の小さな行かぬ話である。

お伽噺の世界が恋しくなる。

わたしとしては、少し時代的なずれがあるかも知れないが、芥川龍之介の「侏儒の祈り」(『侏儒の言葉』)の

わたしはこの春酒に酔ひ、この金縷の歌を誦し、この好日を喜んでるれば不足のない侏儒でございます。

でありたいのである。が、長女という「吹けば飛ぶような大黒柱」も、「大黒柱」である限りなんとかせねばなるまいと考えている日である。



五月節句

香川 酔々

この頃は菖蒲の咲く時季である。むかし人々は妖魔悪鬼を払うため、毒虫除けの菖蒲を屋根にふいてこの禍からのがれようとした。また、紙人形などを飾り、節句を祝った。そのほか、男の子たちが集まって小弓(遊戯用の小さな弓のこと)や印地(多人数が二手に分かれ石を投げ合って戦う遊戯。とくに五月

五日、子供たちが賀茂の川原などで石合戦をした。の遊びをしたことから、いつしか男の子の日と端午の節句がなったのである。

増鏡に「五月五日所々より御かぶとの花、くす玉など色々におほくまるれり」とあるが、これは建長三年五月五日、御深草天皇の御代のことである。したがって当時すでに端午の節句にいろいろな飾り物をしたことが分かる。

江戸前期、江戸では家の前に柵を結って、

アメリカ便り

藤村涼子

北米（シアトル）吟社の主幹、岡田柳華、または安須名郎のペンネームで柳歴四十年の氏から左のようなお便りをいただきました。

前略—今日「川柳塔」と某誌（特に秘す—編集部）の二月号が来た。川柳塔を先きに読むのは何時ものことで、僕は川柳塔の句が好きだからだ。この頃の某誌の川柳は全然面白くない。何か教育勸語の切れ端しを讀むようにでさっぱりピンと張った処がない。気の抜けたビヤみたいものだ。古いとか新しいとか云うのじゃない、川柳らしからぬ川柳の並んでいるだけだ。

不二田—三夫が書いている路郎選の「真珠

それへ轆り、吹流し、槍などを並べた。鯉轆りが作られたのは江戸中期のことである。

江戸末期になると、武者人形などの飾り物も小さくなり家の中におかれるようになった。明治維新のさいには五節句廃止の令が出された。やがて復活はしたが、こじんまりした形式的なものになったのはやむを得なかったことである。

現在吹流しや鯉轆りは依然見られるが、あの家紋のついた轆りや鐘馗を描いた轆りを見

句抄—は何時読んでもいいな。どれもこれも川柳らしい川柳ばかりである。どの句も僕の頭の底に残っている句ばかりだ。こんな句をどんどん柳誌にのせてくれたら変な柳論なんか読むより、よっぽど川柳のためになる。ノドに詰まったり舌を喰むような句や独りよがりの句ばかりが高級だ詩的だと思ってる者の多い現今だ。路郎選の川柳らしい選を読ませたら少しは川柳が解って来るだろう。

読売新聞から

（3月26日夕刊）に—物価の値上がりを取りあげた作品が多い。

「また値上げ市場籠また軽くなり」—栗本藤持。「春や春一万余の軽さなり」—浜田久米雄。「家計簿の赤字を消しに来る」—安達小茶坊は風刺がよく利いている。公害をとらあげたものでは「童謡の海は公害など知らず」—安平次弘道「公害禍メダカも住めぬ川

ることは殆んどなくなってしまう。時代の流れがしみじみ感じさせられるものである。武者人形父親だけの礼を聞き鯉轆りの反抗主婦の手に余る矢車のまわる音から湧く希望天気予報たしかめせず轆り上げ鯉轆り画になるように風が吹き鯉轆り平和な風がものたらす三代目の養子が挙げる鯉轆り日本は狭いといわれる鯉轆り干竿で泳ぐ鯉にも陽が光る

静親堂
阿茶
鬼焼
可住
弘保
美

になり」—平栗金太郎がおもしろい。傍島静馬は「地方などからの投句中には小さな紙片に誤字、当て字などおかまいなく、なぐり書きをしたものがある。これは苦心して作った自分の句を冒読するものだ」と述べている。もっともな意見だ。（室）

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-14
夜間 06 4400 八

記憶力

今西章雅選

記憶力無情に崩す子の日記
 記憶力女は明日へ生きんとす
 捨て犬が僕より先に帰ってた
 記憶力またどん底の頃に触れ
 危しげな記憶押入れかきまわし
 記憶力へんなことだけようおぼえ
 あてにした妻もチヨボチヨボ記憶力
 驚嘆す裨田阿礼の記憶力
 コンピューターに負ける暗算日本一
 持っている品探してる記憶力
 しゃっぽんを脱せた女の記憶力
 そこまでは確とたぐれぬ記憶力
 姑の記憶に合わず嫁となり
 催促を身構えてる記憶力
 過去の句が思索の邪魔となる記憶
 記憶力断片的に引き出され
 税務署で去年のあれを思い出し
 善人のまま衰えた記憶力
 記憶力愛のテストに利用され
 記憶力負けぬ心が歸に負け
 恍惚のへそくりだけは憶えとり
 子沢山母の記憶がちと狂い
 何をしに庭におりたか考える

伊津志 旭童 本蔭棒 洋々 英詩 古方 曉童 一郎 苦句 木魚 白汀 浩輔 千翁 保夫 静観堂 昌道 祥月 鎮也 恵子 里風

今朝の事もう忘れてる 老の坂 里風
 算盤で頭を叩く 記憶力 宵明
 アリバイを乱す 記憶が二つ あり 宵明
 腕白のこただけ 恩師よくおぼえ 明春
 戦陣訓無理矢理 記憶させて 負け 明春
 駄目押せば首をかしげる 記憶力 利美
 何んの事だったか 自分で書いたメモ 利美
 皇統を低唱 父のかくし芸 葵水
 憎しみが加担している 記憶力 葵水

佳

傍線を引いて 記憶をたしかめる カズ江
 肥えられぬ 管ごまごまと 覚えとり どんたく
 記憶力ふと衰えを知る 空虚 緑水
 記憶力ほくろの位置でよみがえり 千翁
 飲み込みも忘れも早い子で 困り 勝巳
 記憶力にふりましてと逃げる 肚 梁水

地

記憶力頼りに 民話蒐集し パット
 目で耳で 肌で女の 記憶力 可住
 軸

天

記憶力の萎えが 頑固に度を加え

五月晴れ

原 独仙選

五月晴れ 明日のプランを練り直し 季 賛
 むしゃくしゃと 癪と 呉た 五月晴れ 軒太 棧
 ぶらんこの 糺む 音して 五月晴れ 宵 明
 五月晴れ 酷使に 音なる 洗濯機 杜 月
 歌声も 一直線の 五月晴れ 梁 水
 留守番を 祖父呼びに ゆく 五月晴れ 十 止 庵
 五月晴れ だのに 別離とは 哀し 七 面 山
 五月晴れ せめて 五月晴れ 扇 水
 公害の空 へうれしい 五月晴れ 重 人
 五月晴れ 孫と カメラが お供する 陽 山
 五月晴れ セールスマンも 背伸び 保 夫
 緋鯉 真鯉 空にも つれる 五月晴れ 悠 泉
 五月晴れ ランドセルも やつと 馴れ 正 朗
 五月晴れ 欠伸 ころした 事務机 古 心
 閑人が こんなに 多い 五月晴れ 不 二
 過疎のよさ しみじみ 仰ぐ 五月晴れ 昌 道
 男の子 こそ いま ます 五月晴れ 祥 月
 南無大師 遍路に のどか 五月晴れ 佳 女
 五月晴れ 医者も 列車も 混み 洋 々

若本多久志著

「凡愚のたわごと」

価 六〇〇円 送 一一〇円

西尾 葉句集

「水 鶉 笛」

送料共 六五〇円

キャンパスの空青々と五月晴れ
 退院の許しうれしい五月晴れ
 運のよき往路は五月晴れの富士
 スモッグの切れ目を覗く五月晴れ
 過疎の村日本画となる五月晴れ
 苗植機休む間もない五月晴れ
 鈍行の旅又楽し五月晴れ
 干し物で団地埋まる五月晴れ
 五月晴れ伝来の畑しかと踏む
 五月晴れこんな庭へも鳥が鳴き
 希望校バスした親子へ五月晴れ
 五月晴れ欠伸がもれるビルの窓
 五月晴れのどかどか救急車
 もぐらという運命五月晴れを見ず
 五月晴れ徹夜明けした眼に痛い
 水平線までをカメラに五月晴れ
 病院をソット抜け出る五月晴れ

英詩 晴風 古方 明春 輝親 伶人 国彦
 潮音 巴ツト 五月 翠月 弘朗 可住 浩輔 魚山 鎮也

五月晴れ魚は釣れても釣れいでも
 初節句孫差し上げる五月晴れ
 五月晴れもったいなくも留守居役
 五月晴れ日曜出勤命ぜられ
 矢車がチカチカ光る五月晴れ

緑水 隆子 芳子 素身郎 肖二

五月晴れみどりの絵具底をつき
 子の未来差し上げている五月晴れ
 八ミリが孫追いかける五月晴れ
 五月晴れ出不精の妻 髪染める

白汀 千翁 カズエ

来客

中川晃男選

来客も無口テレビを見て帰り
 来客へたしかに陶器われた音
 招かざる客と受付も心得る
 呼び鈴はあの方らしい胸騒ぎ
 来客の包みに触れる尻を叱り
 家計簿に来客のことすこしふれ
 年越しのそばのさなかにおわす客
 吉報を届けしこたま酔うて去に
 不躰けな子が居て来客怖くなり
 来客が元気をほめる子の喧嘩
 来客が幼馴染で嫉妬している
 来客の手許見ている孫の智慧
 妻の客お帰りまでを退避する
 来客に夫は体裁よく追われ
 来客のお知恵も借りて解くクイズ
 来客が帰ると菓子分けて食べ
 来客へ先客の菓子開けて出し
 来客が上役だから見得を張り
 何用で来たか来客切り出さず
 来客の粗相笑顔で片付けさる
 気の置けぬ客はこたつで用が足り
 飛入りで幹事泣かせの客がくる
 来客へ出前の寿司の遅いこと

旭童 宵明 軒太楼 里風 里蔭 季賛 貞祐 洋々 扇水 英詩 不春 明醉 晓童 善句 輝親 伶人 松花 一国 利郎 弘美 浩輔

来客を待たず女の身づくろい
 来客へもう打ちとけた一人っ子
 気兼ねないお客にされて箸をとり
 来客へ匂うてくれる沈丁花
 クンと呼び息子の部屋へ女の子
 来客へ妻妻なりの腕ふるう
 それぞれに子等に客あり難祭る
 お客ではないと茶の間へ上がり
 お年玉くれるお客を子がおぼえ
 母の客ジュース一さしゃべり詰め

緑水 保夫 芳子 肖二 葵水 祥月 佳女 鎮也 惠子 和宏

来客が続いて猫もくたぶれる
 先程の電話で五分会いに来る
 珍客に今日の予定を狂わされ
 年頃がいて来客へ気をつかい
 代理で来た子の挨拶が行き届き

隆子 木魚 翠月 可住 悠泉

玄関のベルで家中守備に付き
 この客も親馬鹿らしい子の自慢
 Gパンの娘にGパンの客が来る
 贈賄の来客同士鉢合わせ

千翁 梁水 不二

川柳塔柳箋

価七〇円 送七〇円

初歩教室

— 題「味」 —

本田恵二朗

句を鑑賞する時、この句は作つたものだなと思ふものと、この句は生んだものだなと思ふものと大別してみると、参考になる。

前者は想像とフィクションとによつて、まふままと仕上げた句である。たとえば、雑踏の中にいて、掏りの目が光つてゐるであらう、刑事の目も光つてゐるであらうと想像して、それをうまくフィクションして一句に仕上げたなどである。後者は自分の体験や主観を吐露したもので、つまり句主がその句の中にひそんでゐる。私に言わせると、前者は創作にはちがいないが、優れた句とは思えない。後者は生んだ句だから、句主の分身であり、血が通つてゐる。それを読む者の感動を誘う句である。故路郎先生は、生きた句を作れ、命ある句を作れと叫び続けられ、私も門下生は、それを玉条としたものである。

句会などに於ける題詠は、前者を盛んに用いて点数を稼ごうとする。後者は雑詠として、その価値を衆目に問わんとする。そのど

ちらを取るかは自由であるが、私は後者を望むことしきりである。

大成

母すかぬ味にお皿が遠慮さきみ
句の中に母を入れぬと承知出来ないらしがそれがブレキとなつて十七音字という小さな皿に盛り切れなくなつて、まずい句となつてしまつた。句を味う側にしてみると必ずしも母でなくともよい。句主にとっては母がモデルなのだが、そのモデルを全部表面に出さなくてもよい場合が多くさんあるものだ。

(好かぬ味らしいお皿は放つとかれ)
通ぶつた味付け母は苦笑だけ

同

信仰の歩中味わうように行く
この調子だ・精進あれ。

伊津志

ふる里の味に似てゐるすばらしき
(古里の味に似てゐるなつかしさ)

同

橋筋の屋台で大阪の味を知り
(橋筋の屋台で浪花の味みつけ)

三十四

匙かげん嫁に伝授の台所
(味かげん姑にたずねてゐる平和)

同

味つけがお上手と姑褒めてくる
(味ほめに姑の来る日待つところ)

つとむ

待たされてご自慢ほどの味でなし
人徳がみんな味方にしてしまひ

露杖

味噌汁に沢庵添いて飯の味
(味噌汁に浅づけ添えて朝の味)

同

味噌臭い妻の寝顔が哀れとも
(味噌臭い寝顔へ無言の感謝する)

木蔭棒

たれの味今日は盗みに妻を連れ
(たれの味盗みに今宵妻を連れ)

慶彦

この味が代々老舗ささえとり
(なあるほど老舗支える味である)
倦怠期晩の料理も味が落ち
(倦怠期料理の味もちと狂ひ)

無人

塩少し入れた母の味が出来
(塩少し入れた母の味になり)

翁童

味のある言葉でちよびり叱られる
(味のある言葉で温う叱られる)

同

味ほめて客は何度も舌鼓
(舌鼓うちうち褒める味あげん)

誓二

宝くじ当つた味で又買つ
(宝くじ当つた味がまた買わせ)

ますゑ

味のある言葉で納得させる人
(味のある言葉で納得させられる)

つね

駅弁の味あれこれくわしご年配
(駅弁の味あれこれくわしご年配)

志津

味よりも量がよいので客が入り
(千客万来味よりも量もてている)

好一

叱られた味甘辛く身にしみる
(叱られた後味甘く辛くなめ)

同

姑の味になつてゐる嫁の知恵
やつとこ味枯れてきた銀婚式

重人

(銀婚のときや枯れた味がしみ)
大食家味より量で勝負する

同

味だけはまかせぬ意地で母達者
(大食いの味はどうあれ量に惚れ)

濁水

(味だけはまかせられない老母の意地)
嘔じられて嘔じつた親爺の醜の味

同

味のある言葉も若さにピント来ず
(味のある言葉も若さにピント来ず)

勝己

味のある言葉も若さにピント来ず
(味のある言葉も若さにピント来ず)

陽山

な
ぎ
ら



柳 楽 鶴 丸

つ
る
ま
る

雅号ぶっちゃんげばなし (11)

二十年前に本名で川柳を始めました。

当時口は悪く頑固で強引で何一つ取柄のない男でした。或る日君にびったりの号を付けてやろうと云って付けられた号が鶴丸(□○)でした。人間は丸味がなくてはと色々とお説教。早やく角が取れて丸くなるようにと云って付けられた。一日も早くおりのようにならぬと思ひ乍らもなかなか思ひどおりにほゆかず、先生が御存命ならがっかりされる事だらう。しかし号は勝手に読み変えてしまった。お許し下さいと心で詫び乍ら、一生懸命鶴丸の句をつくる事に努めています。

(会社員 四十五歳)

年褪せた二人味の深味を胸に持ち
(年輪にめおとの味をしみ込ませ)
五分粥の味にもなれて病み続け
(粥の味もうなれきって長い床)
味はよし次の旅行もそこにきめ
(もう一度来る気にさせた旅の味)
板前さん腕の見せどころ味にあり
(板前の年期が味で勝負する)
古里の山菜の味なつかしみ
味白椀京は京なり江戸は江戸
味のあるみ言葉なりと神妙に
(味のある言葉へ人柄信じ切り)
味のある言葉へ人柄信じ切る
(味のある言葉が人柄信ばせる)
一味が足りぬ旅館の御料理
(もう一つ味が足りない宿の膳)

同 洋々 静子 秀村 つた子 同 同 古魚 寿美子

ハブニング人生にある面白味
(人生にハブニングもある面白味)
味のある話やっばりと齡をほめ
(年輪のさすが話に味があり)
民宿の素朴な味に舌鼓
妻の味になれて忘れた母の味
立ちこめた霧の向うにある興味
味気ない孤老の世すぎ優雅とか
老夫婦するめの味を例にひき
家計薄は赤字味などというとれず
叱っては頼んだ妻が子の味方
腹声は腹で味わうものど知り
この家の味をうけつぐ良い嫁御
料亭は味とのれんで勝負する
板前のプライドも売る味の店
口下手の白慢は味で勝負する

同 潮音 杜月 静泉 貞祐 同 同 品光 度利 利美 頼次 満津子 贊平 カズエ 与呂志

咬めば咬むほど味の出るお人柄
山菜の持ち味わかるける倦意期
熱燗の味ほろにがく独り酌む
味一番自慢の腕で客を斬り
戰場で勝った時の忘れじの味
ニコチンをへらしてなが蔑の味
秘書が一と筆入れて訓辞味がつき
いふし銀の味下積みに耐えた芸
味よりも量で育てた子沢山
どん底の生活で知った人間味
題—深—五月二十日締切(七月号発)

まさひろ 露子 繁子 潔持 藤堂 静観堂 同 同 一二三 同 同 比呂路 本田恵二郎



中野の都こんぶ



中野物産株式会社

本社工場 大阪府堺市大仙町1-04 TEL(0722)41-6545
東京支店 東京都中央区銀座4-13-9 TEL(03)425-2700
名古屋支店 名古屋市中区大須2-1 TEL(052)571-5884
横浜支店 横浜市中区磯子4-9-1 TEL(045)55-1411

大萬川柳

「半日」

入選発表

選者 川村好郎

入選 五百三十三句

半日が振り出しになる毛糸針

富田林 花梢

半日は深く出張の軽い足

倉敷 克枝

小半日せめても欲しい主婦の余暇

大阪 誓二

小半日母と喋った里帰り

笠岡 忠三

妻の留守半日だけでようこたえ

大阪 柳信

半日は陽が入るので我慢する

大阪 金三

銀行のシャッター土曜の音で降り

豊中 寿美子

小半日待たせる医者でしたわれる

大阪 竹荘

半日のストにプランをくずされる

豊中 寿美子

ことごと半日煮込む母の味

豊中 寿美子

半日を無駄に過した自己嫌悪

大阪 緑水

半日を惜しむ内助のミシン踏み

平田 代仕男

半ドンを帰れば妻に酷使され

坂井 雀踊子

半日を話上手にぬすまれる

西宮 百酒

半日を勤め顧問の役は済み

堺 一三

過去に似た舞台へ半日泣きにゆく

堺 天笑

タレントは妻も半日ずれた飯

大阪 文秋

手料理は半日もかけ愛を盛る

大阪 好一

半日で済ます仕事にあてがあり

松江 鶴丸

半日はゴロゴロ僕の間でず

東大阪 綾女

観劇の半日母を喜ばせ

倉敷 三林坊

入質に似て国鉄の半日スト

松原 史好

半日をつぶした棚がすぐこわれ

松原 史好

パチンコで半日孤独なおつりの

意のままになる半日へ陽が沈み

半日は家計の足しにするパート

半日もねばり不渡りつかまされ

半日もかかった髪に風まとも

興にのる砂場半日も足らず

半日も待たせて注射打っただけ

半日の花のいのちを咲き競う

焼香するだけで半日棒にふり

半日の洗濯がある春うらら

野次馬のうしろで半日棒にふり

代表で来た半日を背のびする

すばらしい半日になる人が来る

半日でやんちゃの孫をもて余し

職安へ半日覚悟の顔ばかり

小半日立読み後編明日にする

半日の仮病は妻のレジスタンス

年寄りの日溜りがあり小半日

健康の愚痴半日を寝てみたい

特訓で土曜の午後をしばらくれる

役得の半日ゴルフで焼けてくる

招かざる容に半日縛られる

半日のプランへ老いの足も入れ

事務監査気の遠くなる小半日

半日ですんなり解けた妻のスト

半日の変身ふりも良い日柄

半日の長さを尻尻気がつかず

午後からの空白ささやく隙間風

一年に半日だけの敬老会

息つまる半日父兄控え室

銀行から電話土曜の声になり

一、「半日」でも「一日」でもよい句が多く、又むしろ二日か三日の方がよいのがあった。例えば

健康の愚痴半日を寝てみたい
東大阪 肖二
特訓で土曜の午後をしばらくれる
役得の半日ゴルフで焼けてくる
招かざる容に半日縛られる
佳句
倉敷 梁水
半日のプランへ老いの足も入れ
平田 代仕男
事務監査気の遠くなる小半日
大坂 好一
半日ですんなり解けた妻のスト
八戸 かつみ
半日の変身ふりも良い日柄
岡山 品充
半日の長さを尻尻気がつかず
人ノ句
富田林 花梢
午後からの空白ささやく隙間風
地ノ句
大阪 智司
一年に半日だけの敬老会
天ノ句
香川 醉夢
息つまる半日父兄控え室
選者吟
銀行から電話土曜の声になり
寸評

半日を待ちこけきりの愛と知る
金策に半日走る支払い日

半日の苦しみ実る呷々の声
雑詠ならば或いは作者の句とし

て抜けるかも知れないが「半日」と
題詠の時は半日が強く生かされ
ていなければならぬ。

一、半日の留守を空裏にしてやら
れ

この句は頂ける句であるが、偶然
にも一字一句全く同じ句が二句あ
った。整理番号から察して同じ作
者の句でない事がわかり、残念な
がら共倒れの没になった。

無題

関美子

私が川柳の存在を知ったのは、まだセーラ
ー服におさげの頃、恐いものなして、地球は
私を中心に廻っているような錯覚の中にいた
時分の事です。

或るマスコミ柳壇に投句したものを路郎師
がお目に止めて下さって、それも束の間、結
婚・出産・育児と日々追われ、十年間のブラ
ンクを作りました。

たまたま息子の学校へ新任校長がこられ、
これが又、総理も顔負けの苦勞人で独学独歩
の頑固一徹氏。ガキ大将の息子が事を起こす
と即電話で叱られるし、PTAの役員など柄

一、放課後の半日塾へ来て学び
これでは平凡な句である。

放課後の半日塾へ来てまだ学び
とすると少し良くなる。更に

放課後の半日塾へ来て遊び
とすると頂ける。小句会で初心の
方にはこのように説明し、添削し

て抜くこともあるが、句意がちが
ってくるし、大萬川柳では誤字を
訂正する程度で添削しない。そこ
で原句のまま没にした。

昭和四十八年度
ベストテン (三月現在)

一 花梢 八・五 富田林

二 史好

三 克枝

四 弥栄子

五 好一

六 文秋

七 吸江

八・〇 松原 一六 静馬

八・〇 倉敷 一七 重人

八・〇 富田林 一八 柳志

七・五 大阪 一九 代仕男

七・〇 大阪 二〇 一栄

七・〇 藤井寺 二一 可住

五・〇 宝塚

五・〇 大阪

四・五 平田

四・五 大阪

四・五 兵庫

四・五 兵庫

ではございせんから御免こうむりたいと申
せば、

「オレでさえ校長が勤まるのに、若いもの
が」と来る始末です。

「私は癖もあって辺地の小校長」
と書いて出しました。折り返えし氏からは、

「オレも下手の横好きで二十年來作句して
いる。良き友を得た。」との返事が届き、私
達は意気投合した次第です。

私はABCから再スタートしてまだ数年、
田舎の大きなカヤ屋根の家に住んでますから
句も私自身も泥くく、このペンは大変おこ
がましと思いで取っております。

生気ですが川柳はこうあるべきものと言
った考えには賛成出来ませんし嫌です。作者

がそれぞれの立場で、自分の得意とするいろ
んな句を作って欲しいと思います。画家が常
にスケッチブックを携え歩くように、私も言
葉のそれをポケットに入れて、マスコミから
夕方のマーケットの混雑の中からある時は憎
まれっ子達のやり取りから言葉をひらいま
す。

川柳が短詩文芸であると考える時、句には
リズムが不可欠な要素ではないかとも考えて
おります。

別に五七五を固持すると言う訳でなく、リ
ズムのない過ぎに接した時、それは唯、物を言
っているに過ぎない気がして、むなししから
です。とは言うものの、川柳は私にとって

「日々の挫折に耐える十七字」
なのです。

「日々の挫折に耐える十七字」
なのです。

一四 本蔭棒
一五 里風
一一 芳子
一二 太茂津
一三 弥生
一四 本蔭棒
一五 里風
五・〇 倉敷
五・〇 奈良
五・五 東大阪
五・五 和歌山
五・五 大倉

投句先
〒533 堺市堀土緑町一の三の七
藤井一二三方 大萬川柳係

締切 五月二十日
締切 五月二十日
締切 六月二十日

昭和四十八年第六回 (以下略)
「ナイフ」五句以内

五・〇 宝塚
五・〇 大阪
四・五 平田
四・五 大阪
四・五 兵庫

柳界展望

(原稿締切毎月末)

有信 新之助

▼ 番傘川柳本社創立六十五年を記念しているいろいろ企画されているが、そのうちの一つ、文化映画「川柳史探訪」を制作、四月七日に北市民教養ルームで上映。川柳発祥より現代川柳に至るまでを紹介。上映時間約一時間のカラー意欲作だった。本社同人数氏も招待をうけ形水・一三夫氏が出席。

▼ 川柳宮城野社(主幹・後藤閑人)から、合同句集「宮城野」を発刊。参加者百四十二名。巻末に年譜、三百号の足跡が輝やかしい。定価六百円。発行所「九九〇〇〇番」。

▼ 柳宮城野社(振替口座仙台四〇〇〇番)。

▼ 金子青抱さんの句集「一枚の皿」が川柳ジャーナル双書第二編として同社から発行。誰がために生きると思う一枚の皿よ青抱。送料共三百円。発行所「五九九高槻市竹の内町三二八

第七東和苑一〇一号河野春三方同社。

▼ 第25回西日本川柳大会は9月9日開催。(詳細次号発表)この大会を記念して丸山弓削平氏選で雑詠が募集されている。未発表のもの三枚以内ハガキに楷書これは「紋土賞」となる。

▼ 締切六月末日。宛先岡山県久米郡久米南町下弓削、久米南町役場内志部北屋宛。

▼ 長野県川柳大会(第二十七回)は五月三日午前九時三十分から、須坂市臥竜公園市民公会堂で開催。題「雑詠」。

▼ 砂時計「純二郎選」。

▼ 眞夫選「魔除け」。

▼ 千洲選「ふとん」。

▼ 秋水選(各二句)。

▼ 会費六百円(諸費)送句は頂きませんとある。連絡先須坂市太子町大会事務局、永田きみお。

▼ 川柳「路」第三回誌上全国川柳大会。風刺吟、自由吟、十四字詩。課題「広げる」。

▼ 「楽しい」。

▼ 「腕」。

▼ 「残る」。

▼ 3×18センチに一句宛裏には種目、題を書き写宛名、封筒に明記。出句料五百円誌呈締切五月三十日。

▼ 250小田原市鴨宮三七二の二柳水華方川柳吟社合同川柳大会係。

▼ 大阪市職員文化祭が三月九日から十一日まで消防局七階講堂で展示部門を開催。交通局川柳会の北川春五氏の作品が好評だった。

▼ このよき賞四十七年度同人賞塩見一釜、冬眠子賞齊藤栄、草笛賞太田信子、小寺美智子、新人賞石井正己の諸氏に決る。

▼ 成田我洲(青森ねぶた)喜寿記念句碑建立川柳大会弘前市茂森町隣松寺境内六月初旬。賛助金一口千円弘前市和徳町一〇九宮本紗光方我洲句碑建立委員会。

▼ 国鉄川柳十七回全国大会は七月七、八日岡山市山佐別館で開催の予定。

▼ 山上千太郎氏(わかまつ主幹)が退院され目下静養中とのこと。

▼ 「柳宴」三月号で東野大八氏が、NHKドラマ国盗り物語ブームに湧く岐阜の近況に、ゼニ盗り物語と一矢をむくい、氏までが大儲けに目下立腹中。

▼ 川柳しの十一月号で東野大八氏が、番傘八月号の巻頭句(柏原幻四郎氏)を出色話、題作とそのイミ性を推賞、全人間的な「納得

」の場で作句されている本格川柳への一発と論評。

▼ 瓦版の片山雲雀会長は二月八日で八十回目の誕生日を迎えてます御壮健。

▼ 堀口塊人氏健筆川柳文学三月号で、草月流や豊雲流には会場内に飾っておくよりも、いつでもソラックに乗せて街頭行進をした方が面白いような作品がある。それに家元旗をなびかせてプラスチックをつけてみたらどうであろうかと。

▼ 川柳ジャーナル三月号へ橘高薫風氏が「ルパンダの一兵の生 宮中歌会」他七句の招待作品を発表。

▼ 平安三月号で安西まさる氏は、戦前の検閲制度が復活しても、大部分は何んの痛痒も感じない作品でありあえていえば、毒にも薬にもならない作品の氾濫。かりに課題として「天皇」を出した場合、作者は本音を吐くか?他人を意識して逃避するか、と現代川柳の無思想性を批判。

▼ 平安二百号記念誌上川柳大会、雑詠未発表十句選者五名を指定各二句締切七月末。無料発表誌百五十円切手可。1直江武骨?齊藤大雄

▼ 札幌川柳社・柳社賞「あやかし賞」海の詩を忘れて冬を抱く女―ほか(桑野晶子)

▼ ぼくら賞―さり気なく苦を二で割って一夫婦―ほを(高田辰雄)

▼ 幌都賞―勇退の身にはうれしい謝辞が待ち―ほか(上田道雄)

▼ こなゆき同人賞―口惜しさを丸にする土根性―(塩見一釜)

▼ 冬眠子賞―初出勤首輪のかかる音がする―他四句(齊藤栄)

▼ 草笛賞―処女となる一本の股木は地下道より―他四句(太田信子) 掴まえてみれば(中味の無い)甲羅―他四句(小寺美智子)

▼ 新人賞―吠えることを忘れ首輪をはずされる―(石井正己)

▼ 第十回さいたま雑詠賞―ボケットについて―春愁をつめてみる―他九句(須田尚美)

3 後藤閑人 4 磯部鈴波 5 佐藤正敏 6 長谷川鮮山 7 野口北洋 8 大野風柳 9 山田良行 10 福永清造 11 河野春 12 中島生 13 近江砂人 14 鈴木九葉 15 三条東洋樹 16 大森風

来子17石原伯峯18吉岡竜城
無指定失格番号で可。〒6
04京都市中京区姉小路通
柳馬場西入平安川柳社誌上
大会係封筒明記。

▼石川県川柳作家協会発足
理事長に森下冬青氏(蟹の
目川柳社主幹)、理事に山田
良行氏(きたぐに主幹)ほ
か。事務局は金沢市平和町
二丁目十六一四四、吉野卓
洋方。

▼諷詩人(主幹・石原青竜
刀)31号。頒送料共二
百円。発行所一東京都世田
谷区瀬田二の一九の九、同
社。

▼岡橋宣介氏(大阪せんば
主幹)はかねて療養中との
ころご全快の日も近いとの
こと。

▼市岡建史氏(ハワイ)は
川柳塔誌の読者獲得に大わ
らわ由。
▼藤村涼子さん(アメリカ
)は四月末ごろ帰日、五月
には本社訪問を約束された
▼市川鮮山氏(岐阜市)国

盗りて売り出した道三をか
つぎ出して、ぎふまつりに
四月五日)は道三まつりに
なりました。銭盗りのお寺
だけがにこにこです。

▼伊志田孝三郎句集(九月
九日発売予定)故人を知る
人たちの追悼吟やハガキの
短文を左記へ。〒四五〇名
古屋市中村区広小路西通二
の二五、中目川柳会平野文
彦宛。

▼同人の動向△
▼森田布堂氏(鳥取県)は
赤碕川柳会「なぎさ」の編
集を担当、活躍されている
▼久家代仕男氏(平田市)
は自主流通米制度や物統会
の廃止や会計監査などの仕
事で川柳との二人連れはご
多忙らしい。

▼清水一保氏(鳥取市)は
お嬢さんへの結婚のためご夫
婦で京都へ。いつ来ても
心の故郷京にあり一保。
▼どんぐり川柳会の句報百
号を記念して、あやめ池で
川村好郎氏以下参集盛會に

▼清水一保氏(鳥取市)は
お嬢さんへの結婚のためご夫
婦で京都へ。いつ来ても
心の故郷京にあり一保。
▼どんぐり川柳会の句報百
号を記念して、あやめ池で
川村好郎氏以下参集盛會に

新同人紹介

関

美子
一三夫・生々庵推薦

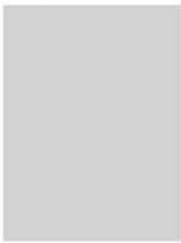
▲海峽吟行の左から小松
園・栗・多久志諸氏。
(撮影・岳人氏)



▼菜の花、わかやま、しん
ぐう合同の「早春の海峽」
吟行はNHKのテレビニュ
ースにも紹介され盛會。
▼直原七面山氏(岡山県)
は四月一日で二十数年勤
務された警察通信部を定年
退職。そして同日日本道路
交通情報センターの岡山セ
ンター勤務となり、第二の
人生を歩きまわれることに
なった。

▼高橋鬼焼氏(広島)の尊
父が三月一日亡くなられた
謹悼。

▼橋高薫風氏(豊中)は三
月二十三日から六日間母堂
と四国遍路のバスツアーを
され、川竹松風氏、須藤後
江さんらとも歓談、熊谷寺
の遠望、平等寺門前の阿
波女性との出会い、海亀の
卵産地日和佐海岸など感慨
ひとしお。



▼水客、紫香、潮花三氏は
生駒の霞乃先生を訪ね五時
間余も川雑当時の思い出話
に花を咲かされた。

▼不二田一三夫氏は新聞西
新聞へ読切小説、戯作「徳
枕の人」と「川柳の一茶」
を執筆。晩年の須崎豆秋氏
を10枚にまとめたものであ
る。

▼水谷竹荘氏(大阪府)は
心不全で入院中だったが四
月上旬に大阪通信病院から
退院。

▼三川侃流洞氏(下関市)
は三月三十一日、国鉄定年
退職で下関市東向町十二の
六の自宅へ帰えられた。

▼五月の句会
▼蝶・若芽合同句会は十三
日午後六時一題・週末・背
中・群衆・コンピ。会場は
八木摩天郎居。
▼南海川柳会一十七日六時
一題・サーカス・古い奴
募集。会場は南海電鉄本社
食堂内。
▼南大阪川柳会一二十日六
時一題・隙・量見・重なる
・机。松崎町二丁目以和貴
荘。
▼川柳東大阪一二十六日六
時一題・錫・貫録・刷る。
会場は東大阪中央公民館第二
集会室。



▼垂井葵水氏(和歌山市)
は千寿子夫人と令息の立教
大学卒業式に参列、その帰
途三河西浦温泉に遊ばれ
ての海を見てもくらべると
歌の浦一葵水。卒業式ダシ
に銀婚旅行する一千寿子。
▼有信新之助は姪の婚礼で
四国へ車ではじめてわたっ
た。

▼五月の句会
▼蝶・若芽合同句会は十三
日午後六時一題・週末・背
中・群衆・コンピ。会場は
八木摩天郎居。
▼南海川柳会一十七日六時
一題・サーカス・古い奴
募集。会場は南海電鉄本社
食堂内。
▼南大阪川柳会一二十日六
時一題・隙・量見・重なる
・机。松崎町二丁目以和貴
荘。
▼川柳東大阪一二十六日六
時一題・錫・貫録・刷る。
会場は東大阪中央公民館第二
集会室。

本社 四月句会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

花の四月もものは今月も盛会である。ご出席のみなさんには句会部一同感謝のしつぱな方というところ。とくに今月は新しく見えな方が五氏。これらの人々を誘ってくださった盟友にお礼申しあげます。

岸和田市下野町の池田香珠夫氏。大東市北条町の土岐トク子氏。大阪市生野区舍利寺の村田百若氏。高槻市大塚町の赤木喜美子氏。さて柳話は菊沢小松園氏。まず断片的な話ばっかりである。前置きして「選が出来るまでのつなぎだから、いつでもやめられる便利な断片集」とはうまいことをおっしゃる。

阿倍野区の出来た由来。つまり阿倍野区史といつたもので、阿倍野区に住む氏の郷土愛に似たお話だった。やはり資料があつての強みは随所にみつけられた。

月間賞杯は川村好郎氏。そのほか天位に中島生々庵、西尾葉、菊沢小松園諸氏という大物ぞろいだったことは新記録である。正に豪華けんらんの天位陣だった。(F)

出席—新之助・形水・文秋・一三夫・浩輔・古方・柳宏子・与呂志・香珠夫・小松園・牧人・滋雀・緑水・喜風・たかし・花梢・柳

太・六竜子・瓢太・肖二・綾女・悦郎・正彰
 ・太茂津・摩太郎・弘生・栞・柳志・静馬・好郎・生々庵・千万里・いわを・三十四・誓二・多久志・いさむ・美幸・葛城・鶴声・百酒・重人・敏・維久子・清人・トク子・俊夫・儀一・百若・吸江・葵水・静香・智子・野迷路・つき子・凡九郎・雀踊子・静々・良子・喜美子・幸太郎・静歩・岳人・弥生・あいき・庸佑・鬼遊・葉子。

席題「笛」

竹中 肖二 選

口笛で呼ばば仔犬が暮い寄り
 交差点違反の笛に呼びこまれ儀
 笛吹けば山の彼方に雲が出来る
 海荒れて何か不吉な夜の霧笛
 録音の笛で結婚さつと済み
 指笛を吹いて明日の虹を描く
 麦笛が呼んでる遠い夢の丘
 伝来の笛哀歎を秘めた艶
 失恋の草笛月もおぼろなり
 口笛を吹けば青春甦えり
 嬉しさがこみあげ口笛となり
 踊りたが笛が聞えぬ日が続き
 過去あつさり捨てて棄てる気持
 教えられた麦笛吹いて飛鳥行
 口笛と共に朝刊入れる音
 総入歯出来て口笛吹く音
 鍵っ子の留守番笛の音が淋し
 口笛もかるやかふたりの道の中
 笛持てば名人芸の型決まり
 虚無僧は一曲所望本江差し
 手配師が法網くぐる笛吹く音
 草笛は若い思ひ出だけ吹く音
 新調の背広口笛吹いて汽笛
 哀愁の夜霧に消えてゆく笛
 口笛で呼び出されて娘を案じ
 多
 久
 志

席題「花見酒」

島居 百酒 選

花見酒ポルノ場面も出るさわぎ
 花見酒強い女にすすめられ
 花見酒に酔ったと見せて娘の手引き
 花見酒は風情ない花見客
 ちらほらの花でよろしい顔あれば
 花見酒毛虫飲みたい顔で来る
 花見酒亡夫と飲んだ日ほろ苦い
 だが飲んだか花見酒また赤字
 巡回のボリスの盃の花も飲み
 物価高どうあろうと花見酒
 花見酒西行法師またひと
 車ごと冥土へ行つた花見酒
 花見酒来ッ赤な顔の真
 義理で来た花見酒が酔うま
 花見酒手形のは思て通い
 花見酒ミニは横目で見て通い
 若者酒目体が車がある花見酒
 待ちきれぬ蕾の車下で花見酒
 待ちきれぬ蕾の車下で花見酒
 生々庵
 柳宏子
 喜美子
 好郎
 弥生
 新太郎
 新之助
 栗久志
 多志
 柳志
 柳人
 俊夫
 トク子
 葵水
 文秋
 形水
 綾女
 静歩
 三十四
 儀一
 悦郎
 一三夫
 水夫
 葵夫
 俊夫
 あいき
 儀一
 滋雀
 維久子
 小松園
 好郎
 静香
 弘生
 肖二

一分間の柳論

小砂白汀

「川柳とは何ぞや」川柳にあまり好意を持たぬ人達から時々こういう質問を受けるので「あなたに地上にある色のすべてと宇宙空間を全部あげるから自由に好きな絵を描いて下さい」というのが川柳です」と、さて「難句に名句なし」という言葉があるが、「単に文字を並べただけの訳のわからんものが川柳で無ければならないのなら、私は川柳をやめる」というヒステリックな声が頻々と聞こえてくる。而し反対側から言わすなら「十年一日の如く陳腐な句材をひねくり廻してパロディ作

業を続けるような精神構造が解らん」と言うかも知れない。元来若者には若者達の、年配には年配の句が有るべきで、青年達に老人の枯淡を求めるのは間違ひであろう。放縦と瀟洒が売りもの川柳が何を好んで垣を設け自縛に陥る愚があるう。何んでも呑みこみ消化する強靱な胃袋を持つてうではないか。青年層が好む革新傾向も快よく受入れ同化してゆくのが老練な先達の手腕というものではなからうか。

八階は八階だけ、影落とす
太陽の知らんこと、す日照権
日照権家の督促言いで出せ
公団へ待ったをかけた植木鉢
日照権こぶし上げた、めさ
日照権棟の大木もめさ
日照権金に見積りけりがつき
太陽は日照権の日に笑う
日照権よぞかばかりの目を仰ぐ
日照権わずかに雑草のびて居る
過疎に生きた日照権に遠く居る
日照権知らぬ倅せ山男
日照権言っても夏場は影がよ
おくればせながら日蔭の花も咲き
日照権肩身のせまいビルにする
一粒の麦にも持つてる日照権
寝るだけの家で日照権気にせず
辛ろじて日照権のある平和
町の猫軒屋根にある日照権
太陽の代りに隣りの目がのぞき
今更らに日照権でも無い長屋
兼題「指紋」 西田柳宏子 選
幾方の指紋おさつては流浪社員
運のよい指紋残して家が建ち
大工さんの指紋免許証の指紋
イヤーな気持免許証の指紋
留守番の子供が指紋拭いて
こす泥が入り家人の指紋まで撮られ
はした金借りる指紋がかすれ
素人がいじりまわして指紋消し
平凡に生きて前科の無い指紋
雪女の指紋を朝日消してわかれ
拭けど拭けどあなたの指紋消えま
小松園 晩歩
つき子 吸江
重形人 形水
維久子 重人
晩歩 重人
鬼遊 鬼遊
三十四 鬼遊
鬼遊 鬼遊
醉々 醉々
葛城 葛城
弘生 弘生
良子 良子
緑水 緑水
弘生 弘生
生々 生々
呂志 呂志

赤ちゃんも指紋とられてあずけられ
バラほめて花粉にふれていた指紋
覆い被さったかたち指紋残される
ふと見れば指紋へ太い條が出来
真実を語る指紋が薄すぎる
印刷屋の指紋もつけてゲラが来る
孫の写真指紋いっばいついて
奇跡は生れず鑑識課の指紋
社長だけ指紋を取らず罪事出る
背信の日から指紋は乱れ出し
いくつかの指紋をつけて家具売れる
アリバイのまやか指紋くつがえし
今日もまた土に消された私の指紋
金の貯まらぬ方へ指紋の渦が巻き
暮しから逃げる指紋を消してゆく
清張は指紋残さぬように書き
悲しい日火口へ指紋捨てにゆく
自力で生きたい義手にない指紋
凶悪にしては美しい指紋もつ

良子 葵水
小松園 いわを
重人 重人
柳太 柳太
野迷路 野迷路
生々 生々
吸江 吸江
美幸 美幸
葵水 葵水
維久子 維久子
生々 生々
雀踊子 雀踊子
悦夫 悦夫
悦夫 悦夫
雀踊子 雀踊子
いわを いわを
純文の土器に残っていた指紋
温泉宿の灯不倫の指紋肌が浮く
子沢山指紋も赤や黒が有り
刑事の眼逃がれた指紋へ黒が照り
頑強に拗ねた指紋の黒秘権
兼題「軽い」 八木摩太郎 選
敬老会軽い土産にある人
ごまかした軽い目方を見破られ
定年が近づき軽うおしを責問われ
軽い気で言った積りを岩田帯
他人事やら軽々と山に教えられ
軽装で遊ぶ半日待たされる
経過よし軽い散歩も許される
偽りの心へ軽い嘘が出る
懺悔して罪の意識が軽くなる
気軽うに引き受け思案まつ
年の功軽い言葉が針を持ち

軽う言う妻を信じた日の不覚
 尻軽い人だが大事たのまれず
 末席の意見は軽くあしらわれず
 また後で電話しますと軽く逃げ
 口軽い割に急所はよく押え
 春ものに成って女の線になり
 軽い咳神経質が眉を寄せ
 インフレに軽い貯金は底をつき
 吹けば飛ぶように生命があつかわれ
 地獄耳軽々聞いて告げに
 軽い気で言うた言葉ははねかえり
 軽量を嘆く土依の貴の花
 履歴書のコネなく軽くあしらわれ
 いとかるく女を抱いて部屋を出る
 二次会の軽い財布はつけで飲み
 愛のない女の口は軽すぎり
 百万を軽う言う奴儲けてず
 かるくとも給料袋拝む妻
 軽いなと思うチップを帯に入れ

維久子 葛城 柳江 吸江 幸太郎 正彰 凡九郎 静歩 一人 重一 六童子 榊 水 緑水 文秋 榊 香珠夫

一分間の柳論

あまり説明的な語列であると主宰尼録之助氏より教えられた「ハイそうですとか川柳を作ってはいけない」になるし、しつこくなつたり愚痴くなるのも嫌い、変な外国語も分量と使途を誤りがち、一番嫌いなのは教養の押売りみたいな気取った句である。

このほか昔の公家さんの歌会のようなコネ廻しは現代では言葉遊びとしか云いようもなく吐きさえるものである。

先輩講師の教えや、好き嫌いがはげしい私

野村岬月

の川柳の道すがらの中で、路郎先生の警鐘（川柳は人間陶冶の詩）が目を追って大きく響き、私の陶冶がなっていないのが自作の中に貧しく見える現在でおこがましいが、泉水をわたる小鼓の小気味よき、潮が満ちて胸がたかまって来るような句、オイと誰かが肩でも叩いて呉れそうな親しみ一杯の句、出来もせぬくせ生意気だとの声も聞えそうだが、こんな句を求めて進みたい。

ひとり身という身の軽さに泊りこみ
 どうせ嘘だらう気軽う貸してやり
 軽くパフたいたい女市場籠多
 お産は軽く未熟児に骨が折れ生々
 吹けばとぶ紙一枚で左遷され柳志
 地裁高裁だんだん軽くなる命後
 身の軽いうちに帰れば母の慈悲摩天郎
 兼題「モニター」 西尾 榊 選

モニターになって理屈が多くなり
 モニターが生きていらしい団地妻
 モニターの覗く世相の裏表柳月信歩
 モニターは賞めてくさして金になり
 モニターの意見が利いた新企画多志
 モニターになって出世をしたつもり
 モニターに洒落れた名前が出て歩き
 モニターで前歴活かす記者上り喜美子
 反骨がついにモニター落るされる一三夫
 好きなだけ言わせてモニター料払い葵水

モニターがヒマめに小まめに買ってもらい
 モニターの意見へ派閥のむつかしさ
 買わされてからモニターの目が狂い
 モニターも知ってるらしい火の車
 モニターの志願やっぱりよく喋り
 モニターもお役所式とくさされる
 モニターの裏の裏突っこいさつ
 モニターが下手につくと値が上り
 モニターと知ってはかりをピンと
 モニターママイってまレント気取
 モニターの右に做えに味気なし
 モニターのもう内閣を見限りぬ
 モニターのご意見どおりにはゆかず
 克明にモニター一年生のメモ
 モニターの妻へ夫の知恵を足し
 モニターは一応市政に目を通し
 モニターをしてから出歩くクセが
 モニターのプライド上手に利用
 モニターは花見どころかペンを執り
 モニターになって女房も才女めき
 モニターの効果社屋に虹懸れ
 底意地悪さモニターとして買われ
 モニターに女は強いものを知る
 モニターを見て特訓ネジを巻き
 モニターの眼にアルミ貨は生々居り
 モニターを集計されただけのこと

古方 清人 葵水 柳志 一 静歩 摩天郎 静女 生女 静香 静風 喜四 緑水 翠太 滋雀 好一郎 好水 尚二 尚水 尚水 尚水 尚水 尚水

鳥洋介句集「白杖」

序文「大森風来子。著者は中支の戦場で左
 右大腿部負傷後、右足切断。その後愛生園に
 入園、失明。切々と胸を打つ川柳が光る。
 発行所「岡山市津島二五四一 川柳岡山社」



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

八尾菜の花川柳会

飯田悦郎報

酔い覚めるまで玄関でほっとかれ儀
 酔うている女の息を顔に受け小松園
 酔うた友帰すに妻の骨が折れ維久子
 鉢巻きを追越してゆく物価高美幸
 鉢巻きしめて男の顔となり三十四
 鉢巻きすれば労組の気が揃い俊夫
 蓋しても端からボロを出してゆき凡九郎
 蓋あげたまま桜貝のひとりごと弥生
 蓋とれば蟻が住まれた金糖壺祥月
 蓋をしとれと頼まれたた砂包み誓二
 山の駅もつたいのないような八重桜静馬
 山の駅二人の声が歌になり美代
 山の駅少年人を恋しがる酔々
 片足で立ってる鶴へ長い冬牧人
 片足で立てる素直にならぬ椅子悦郎
 片足で生きている歩幅を考える岳人
 片足で地球に掛けての自画像か肖二
 土蔵あるばっかりに寄附を断われず鬼遊
 土蔵だけ残り戦後の家が建ついわを
 土蔵まである見栄生活の邪魔をする喜風

川柳たけはら

森井善居報

横道はなかつた庶民のプロフィール
 見合いなれしていららう喰べて去に
 忍従の窓にも映えるあかね雲西合
 平和です一杯機嫌の軍歌です雅鳳
 噴火するとき男対男なり一路
 反省の無口へ風の音ばかり鬼焼
 不機嫌な自分に腹が立ってくる文明
 二人の歩巾へ月もついでくる笑子
 心までピエロになるうかな空は灰色文晴
 値上がりへ豆腐小さく切つて入れそのみ
 青春の残像と佇つ礎づたい蒨居
 かくかくの次第日本は核の宿のぼら
 母の忌が近いぞ冷い風が吹く政己
 もう逢えぬ名を消しかねる住所録英詩
 パン食の朝がこんな忙に忙しい貞子
 恐い夢あなたがそばにいたくれた浄美
 肌を刺す風音おでんの味を増し不朽
 かかる日の想い出手の型足の型房水
 社連隆々飼いならされて課長なり静水
 集金はこもおしめをくぐらされ蘭幸
 年金でどうやら食えそう一人人口凡女
 うっかりと死ぬに死なれぬ物価高東紅
 よしなが川柳社 横山一介報

春の風やさしくミニのももを撫で
 精神科をまた満員にさせる春
 如月にもう春と云う野菜の芽
 春風に乗って税務署から便り
 ランドセル春一番がまだ来ない
 春の風に女の線が浮いて出る
 春風へ婆さんしゃっきり立って見る
 合格の知らせが我が家を春にする
 青春の思い出もんべんの中に居る
 還暦の春恥しい夢を見る胡風
 川柳ささやま 河原みのる報

気が若い母へショールが地味すぎて
 プレゼントした口紅でキスをされ
 よみとれた厚意に冷たい雨が降る
 あんまりな清い厚意がつかれのうて
 落し穴無口が厚意みせて呉れ
 ホロ傘が張り替えられて戻って来
 二十八年のプラシタ厚意寄せつけず
 手を貸した厚意を好意に間違われ
 朱の鳥居三景となる潮が満ち
 あのケチが鳥居献けてる稲荷さん
 大鳥居観光七歩でくぐり抜け
 鳥居出て眠わし元の旅行団喜美代
 思いつき吉日暦は探さない近江
 永病みに鬼門やないかと思いつき
 発明は思いつきから世を変えろ
 運動会欲目できても孫はピリ
 まだ欲目ふんわり残る薄化粧
 欲目でも勝てる相手と思われず
 オーエスケール川柳会 大坂形水報

草やぶに立ちばはぼる倉庫深川
 浄美 秋月 幸仙 芳月 正洲 芳明 久米雄 一声 清春 胡風 蜻蛉 越山 雅佐女 みのる ゆきお よしの 宗珠 可住 竹堂 八陣 喜美代 近江 百合子 素水 いろ女 無聖 無鬼

雨だれの 一節二節 春を呼び 鉄砲
 とんで行く 財布の 軽さに 氣に 重し 幸太郎
 日中親善 パンダ 役空を 飛び 鱈
 跳びはねる子へ一啜は 氣兼ねなし 一扇
 合格を知らせる 母娘 飛んでくる 千夢
 倉庫の 屋根に 平和な 鳩は 止まらない 聖地
 節高き 掌に 反対の 旗を 持ち 神田
 とんで 出たもの 行く宛のない 財布 亜成
 ふしくれた 手が 物語る 開拓史 形水
 社長さん にまで 無愛想な 倉庫番 入仙
 飛び込んで 嫁きた 方は 断られ 好郎
 まるべに 川柳会 村田瓢太報

アンコールなき 人生を すね 啗る 修史
 結ばれる 日の カレンダー じれつ たい 喜風
 コーラス が 今日 も 流れて 村平和 喜生
 天をつく 姿に 樹齡 耐えて いる 岳人
 流し 雑糞の 河原で 子よ 遊べ 真砂
 啗られた 脛の 代償 背かれる 儀一
 ちよつと だけか じり ましたが 凄腕 八郎
 三猿主義 世の 流れに 逆わず 宏
 新入生 後姿 もは ずん だる 比呂路
 リンゴも かけれ ず 過去を なつ かり 三呂路
 議論では 一人 前の すね かけ じむ 比呂路
 釣池の 流れる うきに さね かけ じむ 比呂路
 問われたら 手芸を 少しか じる 趣味 サヨ
 かじられた 息子に かける 療養 中 幸一
 歌声が 流れ 工場は 昼休 み 史好
 川柳 大阪 児島与呂志選

法善寺水かけ 不動へ 賭けた 恋 喜酔
 ここに 来て 別れる 苦の 曲り 角 胡蝶
 渾しない 道背 信の 影 連れた まま 与呂志
 川柳 東大阪 竹中肖二報

職変えて かねて 家業に たどり つき 秋
 転業の 約手 約手に 泣か される 静歩
 転業に 疲れ 果てて の 老職 工 鶴声
 転業の 瞳に ひとの 花 赤く 見え 儀一
 転業に 男だ 一番 賭けて みる 悦郎
 妻と子の 顔 転業の 壁と なり 鬼遊
 冬山の ピーク 雪崩が 待ち かま え 肖二
 幸福の ピーク を 女 不安 が あり 雀踊子
 人生の ピーク の 辺か と 思い 一栄
 起承 転結 ピーク は 承の 終ると こ 古方
 ピーク 時を 狙う スリの 眼 私服の 眼 好一
 トロフィー を ずらり ピーク の 顔で 葵水
 猫の手 も ほしい ピーク を 妻 出 かけ 思月

佳句地10選 (前月号から)
 岡崎 祥月 選

笛吹けば 妻子が 喜々と ついて くる 英詩
 立志 伝運 が よかった ことも 触れ 史好
 何よりも 気休め となる 子の 寝顔 一声
 鯉釣った 話 手の 巾 また 変り 豊水
 濡れて から もう 慌て ない 歩幅 も つ 柳宏子
 現実を お伽ばなし に して 論し 一栄
 相手 みて 言葉 を 飾って いる 女 つき子
 方言の 素朴 が うれし 春の 客 与呂志
 ファスナー が つかれた 女の 背を 這う ミツコ
 評判を 気に する ほど と ほと の 影 聖地

散ってきた隣りの落葉掃かされる
氣長にと医者は不治には触れさせず
いつ酒になるか氣長に待つつもり
河内弁庶民のおいただようり
足音が違つて飼犬また眠る 誓二
足音が熱氣はらんだデモの列 三十四
ハワイ川柳ウイロー社 林蒼蛇樓報

若いネは嘘と知りつつうれしが
どうにでもなれと捨身でうそをつき
慌てずに聴けと相手をきめつけた
口上手嘘と知りつつ乗せられた
さし出したマイクへ慌てて遠く居る
受け取つて慌ててかくすもらい文
ヌケヌケと大臣の嘘は通ります
嘘ついたあとの心にある空虚
珍客にさてとばかりに妻あわて
慌ただしい生活に匂う茶の香り
見抜かれた嘘のきめ手はこの指紋
方便の嘘でどちらも丸くゆき
ドルンショック悲喜こもごものあはれ
信じてるように夫の嘘をきき
すまないと心で詫びて嘘をつき
知りながらだまされてやる親心
嘘一つもつけない人が首になり
あわてずになるに任せて時を待ち
叩き売り嘘と知りつつのせられ
嘘だとは思えぬ程にはほれた振り
患者には胃潰瘍だと言つておき
和歌山七面句会 三幸報

淳子

夜明より鴉来てなく漁港市
賞められてから先生が好きになり
ほめられて転んで泣かぬ 三才児
農業をどうのがれたか虫の声
独酌で飲んで納めた腹の虫
虫すかぬ人の娘に恋をして 清三
虫好かぬ奴と先方も振り返り 政夫
腹の虫酒屋の前で承知せず 太茂津
港の灯恋の代筆たのまれる 陽一
酒量ほめられ過ぎた胃の痛み 葵水
空港に今日も私服の眼が光り 富子
最初から虫が知らせていた破談 宮石
賞状が語る親友の生まじめさ 福代
賞められてさみしいものよ禿げ具合 芳童
風致地区さすがに虫が鳴いている 三幸

南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報

左遷の噂守衛室まで憤慨し 宏子
守衛室指で答えが返つて来 圭水
守衛室若いなやみも持ち込ま 清水
宿直を将棋で負かす守衛室 摩天郎
電気製品揃えてもろて守衛室 徳子
ばつねんと手持無沙汰な守衛室 儀一
紡績の社員食堂いと静か 柳信
社員食堂いつも同じ品ならび 圭水
社員食堂なんか見栄をはる 阿呆 誓二
値が値だど社員食堂立てておき 儀一
社員食堂の隅で故郷の母と逢い 摩天郎

南大阪川柳会 金井文秋報

大器晩成自問自答の時かせぐ 水客
解き切れる矛盾に愛がなおつ 滋雀
ひと言の礼を忘れず使い捨て 千梢

尼緑之助氏句碑除幕式と記念祝賀川柳大会
出雲・松江観光旅行

5月12日(主) 21時32分大阪発(大山2号
・夜行) 13日(日) 7時18分大社着。除幕式
ならびに大会出席(かもめ荘) 14日(月) 松
江観光。15時1分松江発(松風2号) 21時大
阪着。費用一〇、三〇円。

定員三十名で締切ります。お申し込みは、
〒581八尾市八尾木八一七 西尾 葉

(電0729(92)5725)

▼五月十三日は尼緑之助氏句碑除幕式と記念
川柳大会です。(詳細既報)

使い捨てする娘へせめて恩を説く 君子
気軽なのを或日長所やといわれ 古方
日中の交りパング知らぬ顔 喜風
どうごまかそうネクタイ解きながら 好郎
家元の手に器の魂よみが迷い 好一
気軽うに出された金へ手が迷い 小松園
気軽さを迷惑がられている男 綾女
解答がない人生朝が夜が来る 凡九郎
かな書きの賀状が先生やめさせず 一舟
人間に解けぬものあり神が要り 文秋
自信のない漢字はふりかなつけて あいき
誤解の目は大器晩成とも思い 智子
誤解とけ夫婦で肩を叩き合い 静香
構想の骨組出来て腕を解く 市郎
解き切れる矛盾に愛がなおつ 滋雀
単純になれぬ大人だから解けぬ 形水

かな書きの母の手紙をぬくく読み
 パンダの人気日本を塗りつ
 マスコミに洗脳されて使い捨て
 振り仮名を付けて送れと募集欄
 板前の腕が器に添うている一
 金のいる話へ補聴器外される十
 日本へ来たカナに馴染をコンピ
 長という器にあらざり拭く誓
 温室を匂わせカタカナ咲き競い
 気まぐれなよく変りますかな使
 仮名づかいまた老いをまごつか
 詠嘆のかた余韻を匂に残し章
 駒つなぎ川柳会 岸南柳報

恍惚の人老いらくを美しく
 風雲に堪え乗り越えて恍惚に
 永かった道へ恍惚振り向かず
 恍惚に振り廻されて疲れ切り
 恍惚のヒゲ飯ツブにあなだれ
 倅せにひたとりうっとり日を過
 今都合悪いと耳許で囁やかれ
 囁けばよう云わんわと立ち上
 ライスカレー恋をささやく前
 じいちゃんに孫がささやく目
 公園でささやく二人に子供
 囁きの言葉信じたし信じたし
 ささやきを聞いて首相はや
 あっさり入院せよと聴診器
 入院をされて無職があわて
 入院をこぼむ信仰もて余し
 美儀育園
 多津緒 悟郎 岳女 弥栄子 肖二 小松園 摩太郎 小路 点心坊 宏子 忠一

雅号ぶつちやけばなし (112)

ていこう



恒松町紅

つねまつ

特に理由のある雅号ではありませ
 ん。六道湖の雪景色が好きで、始め
 は湖雪といっていました。昭和十五年頃のこと
 です。その頃から川柳を始めましたが、句会で華雪
 という先輩が居られ、よく間違えられるので、あ
 っさり改号、小学校の時から本名定幸をたびたび
 音読みしていただくのを、それをそのままに当て
 字を拾って号にだけのことです。もともと養
 子です。性ど名が釣り合わず、それで号にも扁
 画をつけました。町は丁寧の町ですが今は当用漢
 字にありません。でも大正生まれの愛着心からそ
 のままで、以来三十余年他のいろいろな方面にも
 利用しています。

職業 郵便局員(五十歳)

恍惚が俺には来ないと云い切れず
 城北明朗句会 川口弘生報
 まだわしは社長に成れる夢がある
 児に夢を托して生きている未亡人
 庭に池掘って金魚の遊ぶ夢
 夢の様な話に乗った阿呆らしさ
 孫娘 夢見る年に成長し
 初夢は競馬ですって無一文
 夢のようなこと孫の綴り方
 春の夢いろりに心寄せおうて
 出来なんだ夢を子にかけ子は孫に
 夢に見た月アヘアポが先に
 自転車夢がどいいた子供の日
 あのひと一回だけでいいデート
 疳高い奇声は妻の初白髪
 商店街福引景品で客をつり
 老人齒科の対象になる悲しさよ
 歩き歩きでも夢を見る男にて
 春果
 堺千代乃会 番茶報
 時差出勤彼と彼女もすれ違い
 ラッシュ時乗り込む積りが押し出
 ラッシュアワーには美人の肩を抱き
 ご満足そう顔する籠の虫
 だまされてもだまされても虫の誘蛾灯
 比良の灯しっぽり濡れる虫の宿
 デパートで虫とは云えぬ金で売り
 歌にさええされぬ冬は虫あわれ
 賛え歌が出るころ席は乱れかけ
 昆虫を捕って都会へきの土産
 船旅で瀬戸のラッシュにきもひやし
 役人に虫けらのようあつかわれ
 潔 生仏 茶々坊 シゲ 準人 賛平 三十四 志津 繁子 水
 潔 生仏 茶々坊 シゲ 準人 賛平 三十四 志津 繁子 水
 潔 生仏 茶々坊 シゲ 準人 賛平 三十四 志津 繁子 水

本社五月句会

日時 五月七日(月) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

柳話 西尾 栞

兼題 「泥」 香川 醉々選
(今月の出題・河内天笑)

「買い占め」 垂井 葵水選

「昼下がりに」 傍島 静馬選

「スベース」 若本 多久志選

席題 三題 当日発表
各題三句以内厳守

会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

6月の兼題 「好泡」 「リボ」 「心奇」 「揺れン」

お買物は 若さと センスの マツザカヤ



大阪天満橋
松坂屋

電(06)943-1111
水曜定休

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

水煙抄(10句) 北川 春果 選

課題吟(各題5句以内)

「祭り」 有信 新之助 選

「甘言」 和田 一乃字 選

「名士」 北村 三步 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かじつかいにしてください。

八月号発表(6月15日締切)

川柳塔(10句) 若本 多久志 選

水煙抄(10句) 北川 春果 選

課題吟(各題5句以内)

「パソル」 本庄 金三 選

「灯笼」 馬場 魚山 選

「野球」 森下 愛論 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 二百円(送料十六円)

半年分 千二百九十円(送料共)

一年分 二千四百円(送料共)

昭和四十八年 四月二十五日印刷

昭和四十八年 五月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集人 中島 蓬太郎

印刷所 太陽印刷株式会社

郵便番号 5442

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一・一三八五番
柳崎口店 大阪・三三三八番

●ペンペン草●

★五月号は「オトコ」の特集。毎年このテをくりかえしている。そこで、こしは「緑は異なもの」という男の柳緑三組をお送りする。

★緑は異なもの―出典）さても緑は異なものにて、この嘉兵衛が女房は珍らしいほど色の黒いつら短い肥りじし（都気質）―故事ことわざ辞典。とあるが柳緑三組は、そういう意味の「異なもの」ではない。いうなれば「味なもの」の三

組である。

★もともと「緑は異なもの」は男女の縁のことではあるが、ほく以外のお二組は柳緑ではある。

★流産の子は別にして五人の子の親になったものの、みんな女の子だった。世間なみの親のようにほくも男の子が一人でもいい欲しかった。

★このことは妻に責任がなかったようである。というのは、死んだ先妻が二人、いまの妻が三人産んだが、みんな女の子である。五人のうち二人は死んだ。ほくの責任である決定的事実というのには、先妻も現在の妻

葉子コーナー

▼近頃、年配の白髪の方が少なく、逆に若白髪が多く特に高校生に目立つような気がします。何年前か前、週刊誌に有名人の白髪と称して、藤山愛一郎、三船久蔵等の写真が掲載されておりました。三船十段は亡母の親戚なので、その血筋が、若替えったのか、チラチラ私にも姿を出して淋しませてください。

も再婚で、そして二人とも男の子を産んで生き別れしているのである。他家では男の子を産んだが、ほくとこへ来てからは女の子だけより産まなかったのだから、ほくたる者、あきらめざるを得ないではないか。

★ほくはご承知のように小型人間なので、二度目の妻はジャンボ型をねらった。大と小を二つにして中型、つまり標準型を作る計画を立てたのである。これには相当な勇気がいる。妻はなみせ10センチも高いのだから二人そろって歩くと、夫たる威厳がうすれることおびたしい。

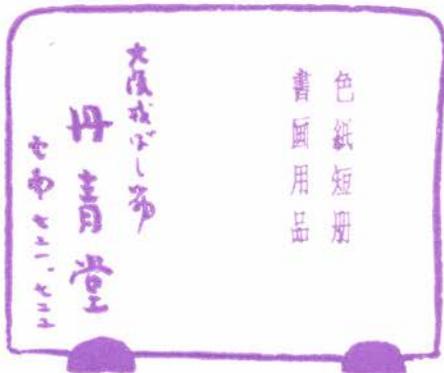
★ジャンボママをもった子どもたちは、みな中型以上である。「どうだ、娘たち、いいババだろう。」★というわけで、衣服はほくも妻も読である。レディ・メイドがダメとなる。★その損失はバカにならない。これも貧乏の原因のひとつだ。

★小型の利点は、キモノ時代なら一反で前かけぐらいとれたが、洋風の今日ではなんの役にも立たない。ただ、雨が降りだした時、大

型人間より濡れるのが少し遅い。―これは落語家が教えてくれた。

本社への不急のご用件は、なるべく書面で、お願いいたします。午前中と夕刻後のお電話は06-718・3218（不二田宅）へ。（編集部）

色紙短冊
書画用品



★傲慢無礼に生まれついでるせい、か、大型人間の前に出ても、ちよっとも相手が大さく見えないのは、いつも大型女房がそばにいるからナレッコになったようである。

★一度書いたかも知れないが、若いころ映画スターになるつもりで甲陽撮影所へとびこんだことがある。そ

の時、小型だから三枚目をやれと、大型役者の大井正夫（川柳家ではない）と租ませようとした。大岩栄次郎という三枚目出身の俳優幹事が「弥次喜多」大小コンビをこしらえるつもりだったそう。

★バカらしいから映画俳優をやめて映画記者に乗りかえたわけだ。―今になって考えてみて、両親からもらった小型を生かしたほうが出世したのではないかなアと思うことがある。

★雑誌だけは大型にしたいです。ね。（不二田三夫）

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

かぶちみり錠・はかに5粒5粒

☆食後すぐのめりめり効果的

☆ぐくわしくは医師や薬局・薬店で



第

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

〈ホテル・旅館〉

- ◆白浜温泉
国際観光旅館 朝 日
- ◆徳島鳴門
国際観光旅館 鳴 門
- ◆勝浦温泉
国際観光ホテル ホテルパシフィック
- ◆鳴門公園ホテル
国際観光旅館 鳴門公園ホテル
- ◆湯峰温泉
国際観光旅館 中 の 島
- ◆紀北橋本
観光旅館 紀 の 川 苑
- ◆湯の峯荘
国際観光旅館 湯 の 峯 荘
- ◆泉南淡輪海岸
観光旅館 淡 の 輪 苑
- ◆新和歌浦
国際観光旅館 萬 波
- ◆大阪なんぼ ホテル 南海

お問合せ・お申込み 南海交通社
日本交通公社・サービスチェーン
大阪案内所 06-(631)-0222



南海電鉄

昭和四十一年一月九日
昭和四十八年四月二十五日
昭和五十二年五月一日発行
第三種郵便物認可
創刊大正十三年 通巻五五二号

川柳塔

五月号

大関
ワンカップ大関

コップにはいったお酒

土間清造株式会社



清酒二瓶 180ml・1.8リットル シヤケットパック5本入り

人気と実力で独走中



田宮一朗

定価 二百円 (送料十六円)